

とれーなーとおぐりの
ほのぼのびより

ryanzi

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人材不足に悩んで後が残されていないトレセン学園に一人の青年が（時空の彼方から）飛び込んできてしまった・・・！オグリキャップのトレーナーに任命させられた彼の運命やいかに・・・！

※実際の内容はそこまで大したものではないほのぼの二次創作（予定）です。シリアルもありますが、胃腸にだいぶ優しい（当社比）ので、ご安心してください。なお、前作の反省も踏まえ、メタネタは少なくなる予定です。

目次

時空の彼方からはるばると	1
このトレセン学園のトレーナーの一人だ。面構えが違う。	7
これじゃまるで変人の巣窟	13
たのしい断食	21
予防接種戦争直前だよ！（無慈悲）	31
予防接種戦争だよ！全員観念しろ！（無慈悲）	38
「うまびよいつて隠語としてはどんな意味なんですか？」	47
ヤツが帰ってきた……と思ったら墓場入	47
り確定	56
タキオンのワクワクお薬タイム！	68
デート見守り隊、出動！	77
ドツキリ大作戦大失敗！	89
理事長は相当カッコしているようです	97
ウマ娘の異常な発情またはいかにしてぐっすりと二人が眠っていたか 前編	103
ウマ娘の異常な発情またはいかにしてぐっすりと二人が眠っていたか 後編	110

時空の彼方からはるばると

20×年！トレセン学園はトレーナー不足に陥っていた！

主にうまびよいとうまびよいとうまびよいのせいである！

愛が重バ場になったウマ娘たちになうわけもなかったのだ！

こうして毎年なんかやかんやでトレーナーが一定数減^退つていく^社！

「危機ツ！たづな！面接の結果はどうだ!!」

「・・・芳しくありませんね」

「嘆息ツ！重バ場耐性があると主張する者は、性的な目的で近づくものが多い！

そんな者をこの学園に入れさせるわけにはいかない・・・！」

「性的な目的でなくても、ちよつと問題ある人が多いんですよ・・・。

ウマ娘にトラウマ持っていたりとか、家庭問題があつたりとか・・・。

そういうった人ほど母性本能を持ったウマ娘にうまびよいされかねません。

まあ、耐性がない人よりはマシなので結局採用してしまつたんですか」

「うーむ・・・女性トレーナーはどうだ？」

「この前言ったじゃないですか。百合びよいされかねないって」

「本当に手詰まりかもしれないな・・・」

理事長は採用リストを見て、表情を曇らせる。

「・・・たづな、あともう一人採用できんか？」

「・・・」

「そうか、もう難しいか・・・」

「ええ、それでもかなり最大限の譲歩なんです」

「絶望ツ！練炭の準備をしたまえ！」

「たづなも一緒に緒させていただきます・・・」

その時、彼らに救いの糸が伸びてきた。

突如、空間がガラスのように割れて、一人の青年が飛び込んできたのだ。

時空の穴のようなものはすぐに塞がれたが、青年はそのまま残っていた。

「・・・あつ、すみません。すぐに出るので」

「採用ツ！君のようなガッツのある人材を求めていた！」

「理事長！確かに一人欲しいですけど、いくらなんでも突然・・・」

「もうこの際誰でもいいんだ！君、ウマ娘の育成に興味はないかね！」

すると、青年は首をかしげた。

「う・・・ま・・・娘？」

「驚愕ッ！ウマ娘を知らないとは！」

「理事長、登場からして、これ最近流行りの異世界モノなのでは？」

「僕、異世界モノもあまり知らないのですが・・・多分、そうかもしれません・・・」

「たづなっ！そういった知識は一般人の前ではあまり披露しないほうがいいぞ！」

さらに、今度は扉が激しく開かれる。

ドアへイタイケド、イキテルダケデモウケモノ

入ってきたのは、獣耳と尻尾の生えた少女だった。

彼女は箸と茶碗一杯のご飯を持っていた。

「ここから炭焼肉という単語が聞こえてきたぞ」

「炭しか合っていないませんか？あつ、これがウマ娘です」

「なるほど・・・見たところ、耳とかは飾りではなさそうですが・・・」

「ちやんとつながっているぞ？」

そのウマ娘は茶碗と箸を理事長の机に置いて、青年に耳の付け根を見せた。

「本当に頭皮とつながっていますね・・・」

「ところで、たづなさん、この人は誰なんだ？」

「知らない人いきなり頭皮見せるとは・・・」

その人はついさつき、時空間を突き破って現れた別世界の人です。

「そういえば、いきなりだったので、お名前を聞いていませんでしたね」

「僕は芦田実といいます。突然来てしまい申し訳ありません」

「いえ、大丈夫ですよ。私は駿川たづなといいます。」

「このトレセン学園の理事長秘書を務めております」

「私が理事長の秋川やよいだ！」

そして、自己紹介をしていないのは、芦毛のウマ娘だけであった。

「……うん？次は私か。私はオグリキャップだ。オグリと呼んでくれ」

「オグリキャップさん……いい名前ですね……」

理事長が扇子を開く。そこには『提案』と書かれていた。

「さて、自己紹介が済んだところで……実青年！トレーナーになってみる気はないかね
！」

「えっ、僕まだ高校生ですけど……まあ、この世界に高校というものがあるかわかりませんが」

「いや、普通にあるぞ？かくいう私も高等部だ」

「そうそう、それにオグリさんにはまだトレーナーがいらないんです。」

「いえ、私もちよつと不安ですが、一見すると、人格的には問題なさそうですし……」

「そうはいつでも、突然そんな役目を任されても、オグリさんが納得するか……」

というか、そういうのはちゃんとした手順を経たほうがいいのではないかと・・・」
「心配無用ツ！今から試験を受けてもらおう！」

合格したならばオグリキャップのトレーナー！不合格でも見習いトレーナーだ！」
「それってどちらにせよトレーナーなのでは・・・？」

「要するに逃がさないってことですよ。もう私たちに後はないんですから」

「あの・・・僕、まだ本当に高校生なんで・・・」

「問答無用ツ！たづな、オグリキャップ！実青年を生徒会室に連れて行きたまえ！」

トレーナー採用試験はそこで受けてもらう！結果を楽しみにしてるぞ！」

「えっ、本気ですか？！ちよつと待ってください！うわああああ・・・！」

三人が去った後の理事長室にアグネスタキオンが飛び込んでくる。

「理事長！たつた今、ここで原因不明の次元歪曲を確認したのだが、大丈夫だったかい
！」

「納得ツ！次元歪曲・・・なるほど、そういうことだったか！」

・・・うん？今、原因不明と言ったか？」

「ああ、原因は不明だよ。高次元物理学の研究は最近始めたばかりだし・・・」

「謝罪ツ！君がやったわけではないようだ！心の中で疑ってすまない！」

「なぜ私が疑われなくちゃならないんだい？！」

なお、芦田は普通にテストに合格してしまった。

それを見ていたたづなによると、すらすらと解いていたらしい。
テストの途中、彼はこう呟いていた。

「……、父さんの本でやったところですね」

このトレセン学園のトレーナーの一人だ。面構えが違
う。

「合格ッ！そして採用ッ！さらに雇用ッ！今日から君はトレーナーだ！」

テスト結果を受け取った理事長は『祝福』と書かれた扇子を広げた。

なんやかんやで芦田実はトレーナーにさせられてしまったのだ。

「・・・今日からよろしくお願ひします、オグリさん」

「ああ、よろしくな、アシダ」

そして、自室が用意されるまでオグリと一緒に学園内を見回ることになった。

何しろ、突然、理事長室に現れてしまったのだ。

家も何もない状態だ。そもそも、戸籍すらないのだから。

「・・・そういえば、さつき、生徒会室に額が飾られていましたよね」

「ああ、あれか」

廊下を歩きながらの会話だ。

なお、二人がそうしている間にもウマ娘たちが駆け抜けていく。

どうやら、この学園は廊下は走っても許されるくらい校風が緩いらしい。

「Eclipse first, the rest nowhere.

あれ、僕の家訓と同じなんですよね」

「アシダの世界にも同じ言葉があるんだな。」

意外と似ているんだな。言語も普通に同じだし。

ただ、違うところは・・・」

「オグリさんのようなウマ娘がないというところですね。」

その代わりに、同じ読み方の四足歩行の動物ならいるんですが・・・。

ちよつと待ってくださいね・・・ありました、手帳」

おそらく、元の世界から持つてきものだろう。

ちよつと使い古された手帳に、彼はある文字を書き込む。

「部首とかでは使われてるが・・・もしかして、これでウマと?」

「ええ、ウマと読むんです」

「なるほど・・・これは驚きだな」

そんな会話をしている間に、ある場所に辿り着く。

「ここは・・・食堂?」

「正しくはカフェテリアだな。私の好きな場所の一つだ」

設備から見る限り、ビュツフエ形式のようだ。

ふと見ると、園児服を着た紳士が紅茶を優雅に飲んでいた。

一見すると不審者でしかないが、芦田にはそうは感じられなかった。

何かの風格が、彼から溢れ出ていたのだ。

気が付けば、芦田は彼の向かい側の席に座っていた。

「・・・おや、君みたいなトレーナーは初めて見たよ。

おかしいな。新人の顔はちやんと覚えたはずなんだが・・・」

「信じてもらえるかどうかはわかりませんが、僕は今日トレーナーになったばかりなんです」

「いや、信じるよ。少なくとも君は嘘は言いそうにないからね」

「そうですか・・・そう言っていたいてありがとうございます」

僕は芦田実といいます。ここの理事長に突然採用されました」

「理事長に・・・?なるほどね。

私は園村英一郎。君と同じトレーナーだ。

これから、同業者としてもライバルとしてもよろしく頼む」

「ええ、お願いします」

二人は握手を交わす。

「トレーナー同士で話すのもいいが、担当バを放っているのは考え物だな」
振り向くと、オグリが頬を膨らませていた。

「あつ、すみませんでした。それでは英一郎さん、また今度」

「ああ、またね」

オグリに腕を引つ張られていく芦田を、園村は笑顔で見送る。

二人の姿が見えなくなった後、彼は険しい表情になってパソコンを取り出す。

画面にはオグリキャップのデータが表示されていた。

「あら、トレーナーさん。オグリちゃんのデータと睨めっこしてどうしたんですか？」

隣の席に座ってきたのは彼の担当バのスーパークリークだ。

「いや、ただでさえ強敵の子がもつと強くなりそうな予感がしたからね」

「あらあら……それはさつきオグリちゃんに手を引つ張られていた子と関係しますか？」

「ああ、大いに関係あるね。彼の顔を見たかい？」

あれは……すでにトレーナーの顔だ。面構えが違う」

そのころ、オグリの学園案内はまだ続いていた。

さつきと違うのは、彼女が芦田の腕を掴んだままということ。

「あの、さつきは申し訳なかったとか……」

「……まだ離さないぞ。さつきみたいに他のトレーナーのところに行かれても困る」

「もう大丈夫ですつて・・・それはそうと聞きたいことがあるんです」
「うん？何だ？」

「オグリさんは本当に僕がトレーナーになって良かったんですか？」

だって、まだ一日にも満たない僕がトレーナーになるなんて・・・
ふと、オグリが歩みを止める。

「・・・私は君を信用してるさ。」

理事長が即戦力として見てくれたんだ。

それに・・・さつき君が話していた人も君をトレーナーとして認めただ。

あの人は私の友人の専属トレーナーだが、実力は折り紙付きだ。

あんな恰好だが、君も何かを感じたから彼に近づいたんだろ？」

「・・・ええ」

「だったら、それだけでも十分なんだ。」

それに、君は信用に足る人間だって何となく思えるんだ」

「・・・ありがとうございます」

「ほら、次は資料室だ。そこは君が一番必要とする場所になるだろうから」

「ええ、行きましょう」

オグリは芦田の腕を再び掴む。

12 このトレセン学園のトレーナーの一人だ。面構えが違う。

「結局、腕は掴むんですね」
「当たり前だろう」

これじやまるで変人の巣窟

芦田がトレーナーになってから数日が経った。

午前中は書類作成や資料室での勉強、午後からはトレーニングという構成だった。

あと、資料室で勉強したことを一人ダートで実践することもある・・・自分の脚で。

あと、オグリとの練習時にも実践しながら指導している。

というか、オグリにも走法を教えてもらっているので、トレーニング終了時には二人とも汗だくだ。

「へえ・・・変わった練習方法やな」

「ああ、悪くはないと思う」

夜、オグリは友人のタマモクロスと一緒に夕食を楽しんでいた。

もちろん、彼女の皿には料理が大盛りである。

「なんとというか・・・切磋琢磨し合うウマ娘同士みたいやな。」

トレーナーと担当バ、という関係よりかは

「そんな気はするな・・・ところで、タマモのトレーナーは最近どうだ？」

「廃課金は相変わらず廃課金や。頼りにはなるんやけどな。」

本当にあの変な精神論だけは何とかしてほしいわ。

何や、課金精神を加速することによる肉体と現実の超克って……。

頭が本当に痛うなるわ……一度、医者に診てもらわうべきや……」

タマモのトレーナーは中国出身の勢金課^{Shi Jinke}という男性だ。

一か月に一度、彼のポストは【林檎】からの請求書でいっぱいになる。

最近では彼の指導精神は課金加速主義としてHoi4MOD作成者から人気を博している。

実績も上げてしまっているので、容易に否定することもできない精神論と化した。

「僕も勢先輩のメモや担当バのデータを見ましたが……。」

まだ僕には辿り着くことすらできない領域だと思い知りました」

「辿り着かんでええわ……って、誰やアンタ？」

「誰とは失礼な。私のトレーナーだぞ？」

「タマモクロスさんですね。話はオグリさんから聞いています」

「あ、アンタだったんかい……本当に高校生ぐらいなんやな……」

「今日は綾秀先輩のアドバイスでオグリさんの食事を見に来たんですが……。」

あれ、綾秀先輩……？し、死んでる……」

芦田の隣に座っていたはずのトレーナーは机に突っ伏していた。

彼は遠野綾秀。長い間トレセン学園に務めているというベテラントレーナーだった。

うまくウマ娘の好意を躲していったことで、その地位にしがみついているのだ。

そんな彼の今の担当バはアグネスタキオンである。

「安心せい。遠野が死んだるんはよくあることや。」

正確に言えば、タキオンの薬による幽体離脱やけど」

「・・・ふううう、よかったです」

「アシダがものすごい溜息をついた・・・」

その時、後ろの方が騒がしくなる。

「な、なにーっ！こ、これは・・・！！・・・今まで食べていたにんじんハンバーグは

？」

スペシャルウィークの食べていたにんじんハンバーグが消えたのだ。

「スペちゃん・・・多分、全部食べちゃったんだと思いますが・・・」

胸の平らな・・・もといスレンダーな逃げウマ娘のサイレンススズカが呆れたように

言った。

そして、数秒後に綾秀はむくつと起き上がる。

「にんじんハンバーグっておいしいよな・・・」

「そうですね、綾秀先輩。食い物の恨みをそこまで体験したかったんですね」

そこには先程のオグリが食べていた料理が写っていた。

その量は今盛られているのと比べると、少なかつた。

「・・・まあ、食べたい気持ちはわからなくもありませんが」

「そうそう、食欲は課金欲と同じくらい人の根源になつてゐるんだ」

四人テーブルの一つ余つた席に勢金課が座つてきた。

彼はタブレットで仕事と課金を同時にこなしていた。

「・・・今、どれほど課金したんや？」

「ワレ、課金加速状態ニ突入セリ。極限ナル未来ニ向ケテ加速セヨ」

この状態に陥つた金課は肉体言語（物理）でないと治せなくなる。

「おーけい、ちよつと話があるで。

お二人とも、これから血が流れるから席を・・・つてもう食べ終えたんか」

オグリの腹は美少女にあるまじきレベルで膨らんでいた。

「わかりました。帰らせてもらいますね」

「じゃあ、私もいったん離れるとするか」

「カ、加速ハ最後ノ関頭ニ直面セリ。予ハ常ニ諸子ノ先頭ニ在リ」

二人が廊下を歩くころには、食堂から再び悲鳴が聞こえてきた

オグリはお腹をさすりながら歩いている。

「……うーん、この世界に断食道場ってあるんでしょうか？」

「……ない」

「今の間は何ですか？」

「……ないものはない」

「僕の目を見て言ってください」

オグリが急に早歩きになる。

芦田も追いかけるように早歩きになる。

沈黙の追いかけてつこが続く。

だが、それは急にオグリが足を止めたことで終わつた。

二人の男女が目の前で言い争いを……否、駄々のこね合いをしていたのだ。

「やだやだやだ！トレーナーとうまびよいしたいよー！」

「やだやだやだ！テイオーとまだそのままの関係でいたい！一線踏み越えたくない！」

いい歳したトレーナーとウマ娘が床に転がってじたばたしていた。

彼もまた、帝王と渾名されるトウカイテイオーを担当する腕のいいトレーナーだった。

……そして、一番重いとされる彼女と一線を越えずにいられている。

それは、彼が追い詰められたときに駄々をこねるからだ。

まだまだ子供っぽいテイオーもそれにつられて駄々をこねる。

疲れ切った両者は普通に寝落ちする。だからこそ、うまぴよいせずに済んでいる。

「オグリさん、僕、先輩たちのように良いトレーナーになれるんでしょうか・・・」

芦田は不安に襲われる。トレセンに入ってから驚かされてばかりだ。

トレーナーやウマ娘たちは皆、有能だが、個性的だ。悪く言えば、変わり者だ。

これではトレセン学園が変人の巣窟といっても過言ではない。

変人度の少ない先輩である桐生院葵だって、名門の出だ。

そんなところで別世界から来た以外は何も無い本当に平凡な自分がやっていけるの

か・・・。

そんな不安を抱いた彼は目の前の光景からも何かを学び取ろうとしていた。

「待ってくれ、アシダ。これから何か見習おうとするのは間違つて・・・あつ」

オグリはその光景を見て、閃いた。

次の瞬間、彼女は何も言わずに仰向けになり、じたばたし始めた。

その意図は明らかであった。断食道場に行きたくないと言っているのだ。

だが、無駄だった。芦田はしやがみ込み、につこりと微笑むだけだった。

「・・・」

「・・・」

沈黙が数秒間続いたが、オグリには何時間にも感じられた。

そして、芦田はオグリの腕をがしつと掴み、残った片方の腕で携帯を取り出す。

「もしもし、たづなさん。断食道場ってありますか？」

あるんですね？じゃあ、そこの手配をお願いします」

たのしい断食

凄まじい衝撃波が山の木々を吹き飛ばす。

すでに断食道場は数時間前に跡形もなくなっていた。

「ぐ、ぐがああああああッ！」

理性をとくに失ったオグリキヤップが叫ぶ。

そして、瓦礫から一人のボロボロの青年・・・芦田が這い上がってきた。

「くっ・・・オグリさん・・・」

二日前のこと・・・

オグリはしょんぼりとしながら電車で揺られていた。

そんな彼女を慰めるように芦田は頭を撫でてやる。

さらにその横では、勢金課がタマモに拘束されていた。

「なあ、アンタも本当に二泊三日の断食に参加する気なんか？」

「ええ、オグリさんがこれから頑張るというのに、僕が頑張らないでどうするんですか

？」

「アシダ・・・頑張らなくていいぞ」

「私も頑張らないから、なんて言うのは禁止ですよ？」

「うぐっ・・・」

「ところで、俺はなんで拘束されてるんですかね、タマモさん？」

「日頃の行いを思い出すんや。アンタは食と同時に課金も断つ必要がある」

無情にも電車は断食道場のある街の駅に着いてしまった。

「せ、せめて最後の晚餐ならぬ朝食を・・・」

「駄目です」

「た、たまも・・・最後の課金を・・・」

「駄目に決まっとるやろが」

それから山を登り、断食道場に辿り着く。

そこは伝統の長い古寺でもあった。

まあ、その伝統とやらも終わるのが確定したのだが。

「やだやだやだやだ！」

「アンタつたら・・・テイオーのトレーナーの真似をするなんて・・・」

門に入る直前で金課が駄々をこねだしたが、結局門に入れられた。

なお、タマモはここで帰ることになる。

彼女は別に暴食でもなければ廃課金でもないからだ。

山の麓まで下りた彼女は、こう呟いた。

「さて、カフェテリアのご飯をタツパに詰めとかんとな」

彼女は来る破滅をすでに予感していた。

数時間後・・・

「オグリさん・・・腹枕なんて聞いたことがありませんよ」

「こうでもしないと空腹が誤魔化せないんだ」

オグリは自分の腹の上に芦田の頭を乗せていた。

こうして腹を圧迫することで空腹感を調和していたのだ。

なお、二人が寝転んでいる傍で金課はエアスマホをしていた。

「まさかぜんさあばあいちいになった・・・」

二日目の朝・・・

「……いつの間にか寝てしまっていたようですね」

「ちゅうちゅう……」

目を覚ますと、芦田の指をオグリが吸っていた。

(可愛い……って駄目じゃないですか！年は近いとはいえ、教え子なんです！)

片方の手で、芦田は自らの頬をひっぱたく。

でも、指はそのまま吸わせた。可哀想だったからだ。

しばらくすると、彼女も目を覚ました。

「……忘れてくれ」

「わかっていきますよ」

なお、金課は仏像ではなくスマホの木像を彫り始めていた。

彼にとって空腹は苦痛ではなかった。無課金だけが苦痛だった。

その日の夜……

「あつ、何かの境地に辿り着きそう」

そう言つて、金課は光を放つて消えてしまった。

より正確に言えば、空間が光を放ちながら割れたのだ。

その穴に金課は落ちていき、穴は塞がれてしまった。

仕方ないので、芦田とオグリは縁側で寝転んだ。

両者ともに空腹が限界レベルにまで達していた。

ただでさえ大食いのオグリにはきつい修行だった。

だが、明日の午前十時まで耐えれば断食は終了だ。

「・・・アシダ」

「どうしましたか?」

「いや・・・そういえば、アシダが前にいた世界の話を聞いたことがないなって思っただけだ」

「うーん・・・オグリさんたちがいないのを除くと変わらないんですよ・・・」

いえ・・・いくつか違う点ならやっぱりありますね。

例えば・・・この世界って、やっぱり厳しいところはありますが・・・幸せだと思います」

「幸せ・・・か」

「ええ、僕の世界って今思い返してみると、悪いことが多かったというか・・・」

僕の家族は例外でしたけど、それ以外がですね・・・まあ、酷いというか・・・」

例えば、別の街から引越してきた友人がいたんです。神戸市って街から。

その街はもう数百年前のことでいつまでも東西対立していたりとか……。

あと、東側が治安の悪い地域とされているんですが、普通に西側でも犯罪が頻発したりで……」

「そこ本当に日本なのか？」

「日本でしたよ……ええ、人口三百万人の新興都市でしたし……。

この世界には存在しないようすがね。地図見ても見つからなかったの……。他には……僕の通っていた学校はいかにも小説でありがちな学校でしたね。

校則が厳しくて、生徒間でも教師との間でも対立があつたりして……。

僕の幼馴染が生徒会長になってからは改善しましたが……今はどうだか……」

「……家族も幼馴染もいたんだな」

「ええ、たまには帰りたいつて気分にもなります。

でも……思い返してみると、やっぱり帰りたくはありませんね。

僕はどちらかという弱人間なんです……どうしても幸せな方に行つてしまふ。

本当のことを言えば、もしオグリさんのトレーナーでなければ、この断食道場からもとつくに脱走していました。それは間違いありません。」

「でも、私の担当という理由とはいえ、私と一緒に断食を耐えてくれているじゃないか」「それを言ったらそうなんですがね……そういえば、もう一つ違う点がありましたね。」

・・・でも、それは僕の世界でもほとんどの人に信じてもらえないことですから。またいつか話すことにしますよ・・・うう、お腹が・・・」

「そうか・・・なあ、アシダ」

「なんですか？僕はまだ殺されたくありませんよ」

そう言つて彼は少し距離を取る。

「・・・本当に殺気を感じ取るのがアシダは上手いな」

「ええ、前の世界でそういうこともありましてね・・・」

「そうか・・・すまない、アシダ。」

私は空腹の余り、お前を憎むようになってしまった。

最初の日、私はアシダを信用するつて言ったのに・・・」

「仕方ないですよ・・・その、もう少し理性を維持することはできませんか？」

「すまない、もう駄目だ」

そして最初に至る・・・

既に十時間以上にも及ぶ戦いは未だに互角だった。

道場も、その周りの森林も、今では更地になってしまっていた。

確かにオグリの力に芦田は遠く及ばない。

それでも彼は実に攻撃を巧妙に避け、オグリを傷つけまいとした。

まるで以前にも荒事を体験したことがあるかのような身の運びだった。

「くっ……もう駄目ですかね……」

ふと足元を見ると、偶然にもリンゴが落ちていた。

おそらく、寺の僧侶のための食料だったものだろう。

さらに、その瞬間、腕時計の針がようやく十時を指した。

「……よしー」

木の実を掴むと、オグリに向かって突進する。

そして、手に持っていた果実を彼女の口に突っ込む。

彼女は芦田の手すらも食い千切ろうとする勢いで食べた。

大事には至らなかったが、手は血まみれになった。

食べ終えたオグリはようやく理性を取り戻した。

「……あ、アシダ？」

「ええ、オグリさんのトレーナーの芦田実ですよ」

「こ、これは……それにその手……まさか……!!」

「すまない！私が……私が弱かったばかりに……!!」

何が起こったのかを察し、泣き出した彼女の頭を芦田は優しく撫でる。
「いいんですよ、よく頑張りましたね。」

さあ、トレセンに・・・僕たちの家に帰りましょう」

「・・・ああ！」

寺だったものへナニイカンジニオワラソウトシテンネン

超高速で帰った二人はカフエテリアの食料を食い尽くすことになった。
もちろん、そのほとんどはオグリによるものだったが。

芦田はいつも通りの量だけを食べた。

これを予感していたからこそ、タマモは事前に料理をタッパーに詰め込んでいたのだ。

そして、この暴虐に一人のウマ娘が怒ったのはまた別の話・・・。

「(生かして) あげません！」

そして、勢金課はひよっこりと帰ってきた。

「はい、別世界のおみやげ」

「えっ、なんやこの毒物」

それは絵の具で構成された料理だった。

いや、料理というにはあまりにおこがましく、冒瀆的だった。

「食え！空腹で無課金だった俺には一番の（ご）馳走だったんだぞ！

タッパーに詰めた料理食べてるお前にも味合わせてやる！」

「ぎゃあああああ！」

タマモはしばらく寝込んだ。

予防接種戦争直前だよ！（無慈悲）

地下に存在する無数の部屋の一つ。

そこに理事長、秘書、トレーナーたちが集まっていた。

さらにはメジロ家御用達の主治医もいた。

「注目ッ！今日は予防接種の日である！」

全員に戦慄が走る。予防接種、それはトレセン学園で一番面倒くさいイベントだ。

まだどこか子供っぽいウマ娘たちはとにかく注射を嫌がる。

ただでさえ力が強い彼女たちが抵抗するのだ。それはもう大変だ。

壁の修理費だつて安くはないのだ。

だから、いかに迅速に、そして被害を抑えながら注射するかに重点が置かれる。

そのために抜き打ちという形で行われることになった。

事前に知らせていたら、ほとんどのウマ娘の姿が学園から消えるからだ。

「一ついいですかね、理事長」

「英一郎か！何だ！」

「古谷とテイオーが駆け落ちしました」

古谷とは件のトレーナーのことだ。

子どもっぽい二人はとっくに察知して逃げ出していた。

彼もまた、ずっと予防接種を受けていなかったのだ。

「心配無用ツ！すでに機動部隊を差し向けておいた。

おそらく今日中に発見できることだろう。

それに、ルドルフくんも彼らを追いかけている！一石三鳥だ！」

「あのー俺からも質問いいですか？」

「拒否ッ！君の質問には答えないぞ！金課くん！」

金課は手足を拘束されている状態だった。

「無課金ワクチンというものをタキオンさんが開発してくれました？あとはわかります

よね？」

たづなが無慈悲に言った。

「馬鹿野郎俺は勝つぞ！」

「はい、主治医さんお願いします」

「関係ありませんが、無課金のSyuziiです」

「なっ・・・まさかお前が数々のゲームで俺を打ち破った・・・うわああああ！」

「あと、二本目もありますからねえ。一本じゃ効かなそうなので」

「どうもく無課金勢のUnnsだよ」

「なっ、お前はわがライバル……ぐわああああ！」

セイウンスカイは既に接種済みだった。

これから起こる混乱の中でゆっくり休むためだ。

「他に質問のあるものはいるか！」

「はい……」

「芦田くんか！君は確か、予防接種は初めてだったな！」

「ええ……そのことなんですが、どうして僕はガラスケースに隔離されてるんですか？」

会議室は微妙な空気に包まれる。

「……その、言いにくいことなんだが……」

いつもの理事長らしさがなくなっていた。

「今回、理事長室で会議しないことも関係するんだが……」

実は、あの部屋に隠しカメラが大量に仕掛けられていたんだ……。

そして、その映像がウマチューブなどいくつかの動画サイトにアップされてしまった」

「それは穏やかじゃないですね……」

「まあ、君は意外と人気にはなってるんだ……。

リアル逆異世界転移ということだな……。

いつ異世界でトレーナーになってもいいようにと本気で生きる者も現れ始めた。

とりあえず、君は今のところプラスの影響を与えているんだが……。

その……我が学園の職員の一人があるコメントを見つけてな……」

たづなはずっと目を逸らし続けていた。

「……異世界から来た人間がこの世界の病原体に耐えられるのか、というものだった。

または別世界から何かとんでもない病原体を持ち込みやしないかという心配もあったんだ」

「なるほど、納得できました。確かにそれは危険ですね……」

「……だが、安心したまえ！今すぐ予防接種ができる用意はしてある！」

綾秀とタキオンが部屋に入ってくる。

二人が持っていたものは注射器……というにはあまりにも大きすぎた。

大きく分厚く重くそして大雑把すぎた。

それはまさに硝子塊だった。

「ふっふっふー！これぞ私の最高傑作！複合同時ワクチン！消毒作用もあるぞ！」

「芦田……この前、先輩を見殺しにした罰を受けてもらおうか……！」

「いや、あれはトレーナーくんが一方的に悪いだろ」

「あの・・・一度の何種類ものワクチンを打つのはよくないのでは・・・」

だが、二人は無慈悲に近づいてくる。

「安心したまえ、君の世界ではどうか知らんが、こつちの世界ではよくなった」

「だからよお、大人しく打たれるや！ひやはははは！」

「トレーナーくん、ちよつと黙ろうか」

「はい」

さすがの芦田も恐怖で少しだけ体が震える。

「大丈夫ですよ、芦田さん」

そんな彼を後ろから抱きしめたのが桐生院だった。

「桐生院さん・・・」

桐生院はこの世界に来てからまさに姉のような存在だった。

だが、英一郎は溜息をついて、こう告げた。

「あつ、理事長。今日一日、桐生院さんを隔離しておきましょう。」

芦田くんは出しておくにしても、彼女は彼と同じ空気を吸ってしまいましたから」

「採用ッ！」

「ちよつと！英一郎先輩！理事長！どういうつもりですか！」

「安心してくれ、桐生院。君のミークの接種はちゃんとやっておくから」

「そうこうしている間に針が芦田のうなじに打ち込まれる。」

「ふわあああああああああああ！」

「すまない、芦田くん……これもトレーナーとして必要なことなんだ」

「ところで、英一郎さんはその必要なことをやりましたか？」

「たづなが笑顔でそう尋ねる。」

「ええ、やりましたよ？書類も提出したはずですが？」

「あら……それではこの映像はおかしいですね？」

スクリーンに突如として映像が映し出される。

そこには書類を偽装する英一郎の姿があった。

「……フェイクだ。これはフェイクに違いないんだ」

「あら？嘘をつく悪い赤ちゃんでちゅね〜」

すでに彼の背後には哺乳瓶……否、哺乳瓶型注射器を持ったクリークが忍び寄って

いた。

「ばっぶううううううううう！」

これで四回。すでに四回も悲鳴が上がった。

オグリはその中に芦田のものがあつたことから何かを察し、彼を探し始めた。

タマモも金課の悲鳴を聞いたが、何も行動しなかった。

無課金ワクチンの開発および接種自体が彼女の依頼によるものだったからだ。

生徒会長のシンボリドルフはトレーナーとテイオーを追跡しているのでいい。

そして、ここからが本当の地獄だった。

予防接種戦争だよ!全員観念しろ!(無慈悲)

「どこだ・・・アシダ・・・!」

オグリは必死に芦田を探していた。

だが、どこを探しても彼は見つからない。

ふと、外にある倉庫の方から足音と話し声が聞こえてきた。

その声の中には彼のものも含まれていた。

「・・・そこか!」

扉を吹き飛ばすと、そこにはうなじを抑えている芦田がいた。

さらによく見ると、隠し階段から多くのトレーナーが出てきていた。

彼らは全員、注射器を持っていた。

「オグリさん、予防接種の時間ですよ・・・」

「だ、大丈夫か?! さっきの悲鳴は・・・! まさか・・・!」

「ええ、僕も予防接種を受けたんです。

複合同時ワクチンつてもう少し痛みを抑えられないんですかね・・・」

「えっ、痛みあったほうが面白いじゃん」

このウマにして、このトレーナーである。

ともかくにも芦田の無事を確認したオグリは袖をまくった。

トレーナーたちは驚愕した。こんなにも素直に接種させてくれるとは！

「・・・君が予防接種したというのに、私がやらないわけにはいかないからな」

「オグリさん・・・」

「早くやってくれ。私だつて怖いんだ」

オグリの柔らかい肌に細く尖った針がぶすりと刺さる。

そして、抗体物質が体内に押し入れられていく。

そのプロセスの間にも彼女はブルブルと震えていた。

注射針を抜いて、絆創膏を張った時には彼女は涙目だった。

「いたかったよお、あしだ・・・」

「偉いですね、ちゃんと耐えて・・・」

よしよしと彼女の頭を芦田は撫でる。

それを見ていたものたちは静かに拍手した。

こつそりと見ていたアグネスデジタルは静かに倒れた。

その顔は実に晴れやかなものであった。

「・・・ところで、どうして芦田まで予防接種を？」

「いや、僕、別世界の出身ですから、この世界の病気に耐えられるかわからなかったんですよ」

「そうか・・・待て、その原理だと君が何か持ち込んでいてもおかしくは・・・」

「そこでこのワクチンの出番だ。今回は消毒物質だけだから安心してくれよ」

タキオンがオグリのうなじにぶすりと例の針を打つ。

彼女は必死に悲鳴を抑えながら、芦田の腕を掴む。

「・・・ひどいよお」

「オグリさん・・・お疲れ様です・・・ごめんなさい」

「いや、いいんだ・・・アシダは何も悪くない。この世界に來ただけなんだから・・・」

ふと、オグリはあることを思い出した。

「・・・なあ、こんな時にあれだが、君の世界にあつた街ってカミハマと言つたよな?」

「ええ、神戸市ですけど・・・どうしたんですか急に?」

金課が急に冷や汗を流し始める。

「いや、タマモから聞いたんだが・・・この前、タマモのトレーナーが・・・」

瞬間、金課は走り出す。だが、倒れていたはずのデジタルが横スライドした。

彼女の脚に躓いて転んだ彼を、綾秀は見逃さなかつた。

「ま、待つてくれ!あの断食の間に変な境地に達したせいで、そこに転移したのは確か

だ！

でも、その街が別の世界のものだという証拠はないじゃないか！」

「・・・アシダによると、この世界にカミハマはなかったそうだ」

オグリのその言葉は死刑宣告となった。

「ご、誤解だ・・・そうだ！俺は横浜に行つたんだ！言い間違えたんだ！」

「お前とはいい友人だったよ。じゃあな」

「やめろ！やめてくれ！ぐわあああああ！」

金課、再起不能。

「・・・あと、タマモはお土産を食べさせられたそうだが」

「そうですか・・・そうなると・・・」

芦田が言いかけた瞬間、再起不能だった金課がゆつくりと立ち上がる。

「・・・そうか、俺にはまだ、復讐できる相手がいる」

静かに倒れたままのデジタルのキックが彼の頭に直撃する。

だが、彼は倒れなかった。それどころか、綾秀から注射器をひったくつた。

「そういえば、俺にあれ食べさせやがったのはミタマという奴だったな・・・」

タマ・・・何か名前似てるからアレの代わりに復讐されてもらうぜ・・・ははははは

！」

「あ、あいつ・・・何度も注射されて頭がおかしくなったのか」

さすがの綾秀もドン引きした。

なお、デジタルは専属トレーナーの青下場樋渡史あおげぼとうとしに素直に注射された。

彼もまた尊死とうじを目指して、トレーナーの門を叩いた人種だった。

そんな二人は恋愛は見る派なので、そういうこと寿退社にはならない。

「さて、僕も行かないと・・・」

既に他の者たちは電撃戦を展開していた。

次々とウマ娘たちの悲鳴が聞こえてくる。

たづなもやよいも参戦しているので、態勢を立て直すまでウマ娘たちになす術はない。

これで勝つる・・・と思ったのも束の間だった!

『こちら生徒会!生徒諸君!SKークラス! 予防接種シナリオ!』が進行中だ!

素直に受けるものはそのままトレーナーたちのもとに向かえ!

だが、注射の痛みを憎むものは立ち上がれ!

そして、隙あらばトレーナーとうまびよ・・・トレーナーたちを鎮圧せよ!』

エアグルーヴの声だった。

「・・・やっぱりすごい人だとは思っていましたがね」

テストを受けに生徒会室に行ったとき、彼は生徒会メンバーに会っていた。

一目彼女たちを見たとき、彼は危うくひれ伏しそうになったくらいだ。

だが、このままではまずい。ウマ娘たちの雄叫びが聞こえてきた。

というか、すでにエアグルーヴのトレーナーが戦意を失っている。

「……いえ、むしろこれはチャンスかもしれないですね」

「どうしたんだ？アシダ？」

彼は手帳に地面に地図といくつかの数式を書き込む。

それは、ここから生徒会室までどのくらいの距離と角度があるかの計算だった。

彼はエアグルーヴのトレーナーを掴むと、思いっきり投げた。

「先輩！ごめんなさい！でも、それで生徒会室まで直行ですよ！

それで隙を突いて、自分の担当バに針をぶっさしてください！」

「できるかこの野郎！やだー！死にたくないー！」

「……アシダ、人間なのに力がすごいな」

「それでも、前の世界で鍛えられましたからね……」

こうして彼はそのまま生徒会室の窓まで高速で飛んでいく。

『……あー、トレーナーたち。接種をやめないようなら考えがある』

その時、また放送が始まった。

この仕返しはいつかしてやるから覚えてろー!」

とにかく、これでウマ娘たちの士気を削ぐことには成功した。

この後はとんとん拍子、とまではいかなかったが、接種は成功した。

素直に受ける子も結構いたのもあったが、生徒会が陥落したのが大きかった。

こうして予防接種は無事に成功したといえる・・・。

事前に済ませていたはずのタマモが別の注射をされるハメになったが。

ちなみに、テイオーとルドルフとトレーナーは機動部隊に無事に捕縛された。

海に面した崖で修羅バ・・・ではなく、駄々をこね合っていたらしい。

その後は主治医に無事に注射された。

無論、トレーナー側に被害がなかったわけでもない。

だが、芦田とエアグルーヴのトレーナーの活躍もあり、比較的軽微だった。

「褒美ツ！大事に使いたまえ！」

二人には特別報酬が支払われた。

「芦田、罰として半分没収な。本当に怖かったし、ガラス痛かったんだぞ・・・」

「はい、すいませんでした・・・」

「よし、これで新しいそろびよい本を・・・」

「たわけ、没収だ。ほれ、返すぞ」

「あ、ありがとうございます・・・」

「あと、そろびよい本と言ったか?少し話がある」

「ひや、ひやい・・・」

「・・・たわけ♡」

エアグルーヴのトレーナーがどうなったかは誰も知らない・・・。

「うまびよいって隠語としてはどんな意味なんですか？」

その瞬間、カフェテリアは史上最高の低温を観測した。

誰もが固まり、そして冷や汗をかいていた。

よく考えてみたら、当たり前だった。

子どもは普通に踊りの方しか知らないのだ。

だが、年を経るにつれて、もう一つの意味が加わり、うまびよい（意味深）となる。

それはこの世界に住む者たちにとっては当たり前的事实。

だが、別の世界から来た者にとっては？

「なんか踊り以外にも深い意味があるような使い方をするって聞いたので」

「アシダ、その・・・私にもわからないなあ・・・」

多分、普通に踊る方だと私は思うんだが・・・そんな隠語、私は知らないなあ・・・」

それがこの結果である。

オグリはどうしても顔が赤くなってしまった。

それを見た芦田は何かを察し、彼もまた顔を赤くしてしまう。

「・・・その、すいませんでした。お互い忘れましょう・・・あはは・・・」

「そ、そうだな・・・あはは・・・」

そんな二人の姿を見て、樋渡史とデジタルは静かに倒れた。

そこで話はおしまい・・・とはいかなかった。

「忘れちゃダメですよ！」

突然、桐生院が現われたのだ！

「お二人は思春期という一番敏感な時期です！何か間違いがあつてはいけません！

オグリさんは教科書でもいいとして、芦田さんは教科書を持つてないじゃないですか

！

それじゃあいけません！今から芦田さんには保健体育の授業を二人つきりで・・・」

その時、ポンポンと桐生院の肩が叩かれた。

そこには、英一郎とミークが立っていた。

「・・・桐生院くん、これから仕事の時間といこうじゃないか」

「・・・ぶー」

「はっ」

こうして彼女は連行された。

気まずい空気だけが残された。

樋渡史とデジタルは死んだままだった。

数日後・・・

「青春ってやっぱり甘酸っぱいよな」

「どうした急に？」

タキオンの研究室で、綾秀が突然呟く。

「いやさ、俺、あの二人の練習風景見に行ったんだわ」

「ほう、どうだったんだ？」

「とにかく距離間を上手く調整しようとしてた。」

一緒に走ってたけど、ちょっとでも近づいたらすぐに赤面してたし、

うまびよい伝説の練習も、恥ずかしがりながらしてたし・・・」

「うっわ、甘酸っぱいね・・・」

「俺もさ、あんな青春送ってたよ・・・」

でもさ、中学の時はトレーナー目指すというだけでウマ娘以外の女子から変態扱い・・・。

いや、男子からはちよつとだけ英雄扱いされてただけだよ・・・。

高校の時はトレーナーになるための勉強に必死で・・・青春のせの字もなかったな・・・。

それでさ、制服とか見るとさ、もうあのころには戻れないんだなって……」

「やめろ……やめてくれ……まだ乙女の私にもなぜか刺さるんだが……」

「油断しないほうがいいぞ……あつという間に時は過ぎていくんだからな……」

なお、作者は書いてあるだけで心が崩壊したものとする。

「たまに、トレーナー目指してなかったら……って思うんだよ……」

夏の暑い日に女の子からスポーツドリンク渡されたり、夕方の教室で一緒に勉強したり、

すっかり暗くなった帰り道、そこでくだらないことを話して帰って……」

「ぐわあああああ！トレーナーくうううん！やめてくれえええええ！」

「だから、実験室から出ようや……」

「えっ……実験したいし……」

「白衣を着た立派な研究員になった私……」

自由に研究ができるのに、なぜか心が満たされれない日々……

夕方、たまに窓の外を見ることがある……

眼下では二人の高校生が楽しそうに……」

「わかった！わかったから即興の怪文書を作らないでくれえええええ！」

こうして二人は夕方のトレセン学園に繰り出した。

まだあちこちでトレーニングをしている声が聞こえる。

夕焼けに照らされた廊下は明暗がやけにはつきりとしていた。

「うわああああ・・・」

「トレーナーくん、廊下歩いてるだけじゃないか・・・うつ・・・」

とりあえず、何とか平静を装いながら彼らは歩いた。

そんな二人を、窓の外から芦田とオグリは見ていた。

「なるほど・・・あれが大人の距離感ですか・・・！」

「うむ、あれが理想なんだろうな・・・」

「でも、まだ僕にはなかなか真似ができませんね・・・」

「・・・なあ、無理をしなくてもいいんだぞ、アシダ。」

アシダだって本当は高校生なんだ。大変だったら相談してくれ。

本来は青春を楽しむ年齢でもあるんだから」

そう言われた芦田は空を見上げる。赤面しているのは明らかだった。

「・・・そういわれてもなかなか難しいですね」

「・・・そうだ。いい方法があるぞ！」

オグリは急に彼の手をぎゅつと両手で握った。

「な、なにを・・・！」

「我慢できなくなったら、こうやって手をぎゅつとするんだ。

それで、距離が近くなっても平然としていられる練習になるはずだ」

「・・・そう言われたらそんな気もしますね」

次の瞬間、綾秀は窓から身を乗り出して叫んでいた。

「抱けえっ!! 抱けえっ!!抱けっ!!抱けーっ!!抱けーっ!!」

「黙れトレーナーくん!気持ちはずっごくわかるけど!

つてこら!トレーナーくんの言うことを真に受けるんじゃない二人とも!」

二人がどぎまぎしながら抱き合っていた。

「・・・忘れましょう」

「ああ、そうだな・・・」

赤面してはいたものの、その顔は晴れやかとしていた。

「また綾秀先輩には感謝しないといけませんね・・・」

一方、綾秀とタキオンは足早に去っていた。

「ふう・・・あのままでは浄化されるところだった・・・!」

「まったく、トレーナーくんったら・・・!」

二人は夕暮れの教室に逃げ込むように駆け込んだ。

「ふう・・・やっぱりこういうのを見ると懐かしいな。

中学の時はこんな教室で他の男子と馬鹿みたいなこと話してたな」

「そうなのか・・・一応、青春はしてたじゃないか・・・」

「そうなんだけどな・・・一人だけ、俺を応援してくれた人間の女子がいたんだ。

その子はいつも学級委員長でな・・・男子と一緒にバカ騒ぎできるタイプだった」

「へえ・・・変わってるね」

「ああ、俺もその時は気付けなかったけど、恋してたと思うぞ」

「・・・そうか」

「先月、俺の中学時代の親友と結婚したそうだけだな」

「やめるんだ」

教室の窓の外からはウララと彼女のトレーナーの姿が見える。

二人とも楽しそうに練習していた。

「・・・もう一回、青春取り戻せるかな」

「取り戻せますよ」

樋渡史とデジタルが教室に入ってくる。

よく見ると、その足は透明だった。

「お化けええええええ!!」

一方、生徒会室・・・。

「夕方の学校には怪談がつきものだな」

付き物と憑き物・・・それを理解したところにはすでにエアグルーヴのやる気は下がっていた。

またまた数日後・・・

「汗と努力というのもいいものですよね！」

「どうした急に？」

今度はデジタルがタキオンの研究室に来ていた。

「いえ、あの二人、いつもの調子に戻っちゃったんです。

でも、ああいったのもあたし好きかなあつて！」

「そうかそうか・・・今回は死んでないんだね」

タキオンはデジタルの足元を見ながら言った。

ちゃんと足が実体として存在していた。

「毎回とうちゃんと一緒に死んでるわけじゃないですよ！

私を一体何だと思ってるんですか!？」

「尊いとすぐ死ぬウマ娘」

「ひっどーい！」

「それで・・・そんなこと言いに来ただけじゃないんだろ？」

「・・・ええ、幽霊状態であの二人を見てた時、変な視線を感じたんです。

とうちゃんもそれを感じてたようなんですけど・・・見つからなかったというか・・・」
「そうか・・・やっぱりね。実はカフエも同じこと言ってたんだよ。

・・・これは少し調べる必要があるかもしれないね」

そう言って彼女は葉の調合を終える。

ヤツが帰ってきた・・・と思ったら墓場入り確定

トレセン学園の朝の始まり方はいくつかある。

普通に鶏だったり、朝食の匂いだったり、ゴルシのやらかしだったり・・・。

だが、最近ではこのような始まり方が多くなつた。

「「やだやだやだやだー」」

古谷、テイオー、ルドルフの三人が起きて早々駄々をこね合う。

その声で皆が目を覚まし始める・・・のだが、我らが芦田実はというと・・・。

「ぐー・・・ユナさん・・・むにやむにや」

今日は意外となかなか起きなかった。

このままでは昼近くまで眠り続けそうなくらいには。

それもそのはず。今日は休日なのだ。

さらに、昨日レースで一着をとったが、その心労も凄まじかった。

そういうわけで、彼はぐーすかと寝ていた。

だが、彼の眠りは突如として妨げられることとなる。

ドアへドンドンッ

「掃除！開けるんや警察や！」

「下がっていきい、タマ」

すると、ドアはガチャンと普通に開けられた。

オグリがどういいうわけか合鍵を持っていたのだ。

そのまま二人が入って来たにもかかわらず、芦田はまだ寝ていた。

「この寝坊助はあ……ウチのトレーナーじゃあるまいし……」

「……意外だな。部屋が散らかってるとは」

芦田の部屋の散らかり具合はどこか退廃的だった。

どっかの特色フィクサーが色々と暴れて帰ってきた部屋のように。

というか、ソファアで寝転がっているのも同じだった。

「ほら……いい加減に起きるんや！」

というか、昨日の格好のままやないか！」

「……うーん、今日は休日ですよ、ユナさん」

その言葉で部屋の空気は冷え切った。

しかも、オグリを見て言ったのがまずかった。

「……あれ、オグリさん？どうしてここに？」

「……掃除しに来たんだ。それより、ユナって誰だ？」

「僕の幼馴染ですが・・・あれ？どうしてそれを・・・」

「寝言で言ってたんや・・・その子、オグリに似てたんか？」

タマモが睨みながら言う。

「ええ、見かけは・・・性格はもちろん違いま・・・」

数十分後・・・

「解せません」

そう言った芦田の両頬は立派に紅葉していた。

「まあ・・・そうなるわなあ・・・」

朝食ラツシユが終わった後のカフェテリアは基本的にトレーナーが入り浸る。

今、彼の向かい側の席にいるのは綾秀だ。

「今の彼女を元カノの名前で呼ぶほどの所業だぞ」

「・・・そう言われたら、すぐに謝りたくなってきました」

「まあ、また時間を置いた方がいい。あっちも冷静さを取り戻すだろうから」

「そうですね・・・」

「というか、お前の幼馴染ってオグリに似てたんだな・・・」

「見た目だけです。性格はある意味ルドルフさんでしたね。

皇帝つてわけではありませんが……皆の幸せを願っていたというか……。

そもそも目の色自体が違ったので……」

「なるほどね……まあ、お前のことだから、オグリにユナとやらを求めないだろうな」

「ええ、当たり前ですよ……深層意識ではどうかはわかりませんが」

「それが表層に出ると危険だ。俺の同期の一人もそれで逃げるはめになった」

「逃げるって……」

「そこからはぼくが話そうじゃないか」

突然椅子に座ってきたのはトレンチコートを羽織った男だった。

「か、帰って来たのか……!」

綾秀はその男の姿を見ると驚愕の表情を浮かべた。

「ただいま、綾秀……ようやく覚悟が決まったよ。

……なるほど、君が例の異世界系トレーナーくんか。

ぼくは奥瀬川祐樹。ナイスネイチャという子の専属トレーナーだった」

「あなたが……資料室であなたの記録は読ませてもらいました。

数か月前までナイスネイチャという正妻……?ウマ娘を……。

なんか変なこと書かれています……あと、行方不明になっていたとお聞きしまし

たが・・・」

「樋渡史のやつ・・・まあいい、ぼくはとにかくその子の専属トレーナーだった。でも、ぼくは彼女を彼女として見ていなかったんだ・・・」

さて、ここからはちよつと重くてつまらない話だが、聞いてくれるかい？」

「・・・ええ、聞かせてください」

芦田は聞かなければと直感した。

「・・・中学から高校にかけて、ぼくのそばには一人の少女がいたんだ。

言っておくけど、その子は人間だった。ウマ娘じゃない。

そもそも、ぼくの住んでた街にウマ娘は一人もいなかったし・・・。

まあ、当時、自堕落だったぼくを事あるごとに世話してたのがその子だったんだ。

トレーナー志望だって言うのと、絶対になれって指切りげんまんをさせられたし・・・。

それで、勉強まで見てくれたね・・・彼女はもつとレベルの高い高校に通ったけど。

・・・別々の高校に通うようになってからも、よく来てくれた。

でも、当時は地域差があった。トレーナーという職業に対する印象の地域差がね」

本を走り読みしたときに、そのことが書いてあったのを芦田は思い出す。

ウマ娘の人気は今も昔も変わらないが、トレーナーの扱いは違った。

トレーナー志望というだけで性犯罪者予備軍されることもあったらしい。

「俺も中学のときはそれで女子に嫌われたな」

「そして、彼女の通っていた学校はとくにトレーナーに対する風当たりが強かった。

そんな場所で、彼女はぼくみたいなトレーナー志望の男の自慢をしてみましたんだ。

それでクラスから浮いた彼女は嫌われていき……あとはわかるよね？」

「ええ、僕の世界でもそういう話の末路は同じですね……」

「ぼくは彼女の遺書を見て、この世の全てを憎み嘆いたよ……」。

「今でも、彼女にトレーナー志望だということを話していなければと後悔することがある」

彼は一瞬涙ぐむ。

「……まあ、そんなときに俺とこいつは会った。」

俺も当時は暗い高校時代だったからな、意気投合はした」

「君がいなければ、本当に彼女の後を追っていただろうね」

「……その話の流れからすると、ナイスネイチャさんに彼女を投影したんですね」

「ああ、その通りだ……それがぼくの犯した最大の悪行だった。」

ネイチャは毛色も、世話焼きなところも、とにかくあの子に似ていた……。

ぼくはネイチャにすでにこの世にいない少女の幻影を求めるようになった。

でも、彼女はそんなこと一片たりとも望んじやいなかった。

あの子は自分を自分として見て欲しがっていた」

奥瀬川は溜息をつく。

「・・・しかも、彼女はありのままのぼくを愛してくれていた。

それに対し、ぼくの方といったら・・・まあ、最低の屑だったね・・・」

「・・・」

気まずい空気がカフェテリアを包む。

その空気が風に漂い、外で練習していた樋渡史とデジタルに達する。

二人は吐血して倒れた。話が尊くないうえに暗すぎたからだ。

「・・・いつの間にか彼女はぼくを監禁しようとして試みるようになった。

たぶん、ちゃんとぼくが彼女を見るようにするためにだろうね。

ぼくはこの学園から逃げた。とにかく逃げた・・・怖かったからだ。

でも、今となっては・・・だから、ぼくはここに戻ってきた。

もう一度、ナイスネイチャ自身と向き合うためにだ・・・。

・・・君にはぼくのような過ちは犯してほしくない」

「・・・わかりました」

「あと、ネイチャがどこにいるか知らないか？」

あんなことがあったから、実は理事長室にもトレーナー室にも行けてなくてね・・・。

ははっ・・・向き合おうと言っておきながら、まだ怖いんだよ・・・」
「任せてください」

そう言うのと、芦田は携帯を取り出した。

「もしもし・・・ええ、戻つてきましたよ。」

はい、今、学園のカフェテリアにいます。トレンチコートを着ていて・・・。

・・・ええ、はい。ちゃんとネイチャさんと向き合うつもりでいます」

彼は電話を切った。

「商店街の皆さんに電話しておきましたよ。」

多分、ネイチャさんにも連絡が行くと思います」

沈黙が数秒間続く。

椅子から立ち上がろうとした奥瀬川を綾秀が取り押さえる。

「おっと、どこに行くのかね？」

「いやだ！死にたくない！向き合おう前に殺されるなんて冗談じゃない！

というか、君はどうして商店街の人たちと知り合いなんだ？！」

「休日を訪れてみたら、いつの間にか知り合いになったんです」

「ちくしょう！やっぱいい人たちだよ！君、大事にしるよ！

別世界から来た君にすぐく親切にしてくれる人たちなんだからな！

ああ、でもやっぱり死にたくない！離してくれ、綾秀！

「駄目に決まってるだろうが」

遠くの方から何十人分もの足音が聞こえてくる。

「あつ、奥瀬川先輩じゃないっすか！俺の武勇伝でも話してたんですか！」

さらに金課までやってきた。

「・・・そういや、俺たち、当時まだガキだったこいつに会ってんだよな」

「へえ、そうなんですか」

「ああ、そうだったね・・・当時から課金課金って言ってたね。

金をくれて言われて渡したら、そのお礼につて、彼女の通ってた学校焼き討ちしやがったね。

まあ、彼女をいじめてた連中は全員行方不明になったから、すかつとしたけど」

「当たり前じゃないですか！だって、俺の課金ついでの特レーナーライフの邪魔になるし！」

「課金ついで・・・」

足音は段々と近づいてくる。

血を見ることになるかと察知した芦田はそそくさと立ち去った。

なお、トレーナーに対する風当たりは最近になって消えた。

別世界から来た青年がトレーナーとなって人気を博したのが要因だ。

芦田はそれをしばらく知ることはなかった。

「・・・向き合う、ですか」

廊下を歩いていると、オグリにばったり出会った。

最初は気まずい空気が流れた。

だが、芦田は勇気を振り絞って、頭を下げた。

「・・・今朝はごめんなさい」

「アシダ・・・頭を上げてくれ」

すると、今度は彼女の方が頭を下げた。

「すまなかった・・・わかっていたはずだったんだ。

君がこの世界で寂しい思いをしているってことぐらいは・・・。

だから、いいんだ。君が求めるなら、私はユナの代わりに・・・」

すると、彼は彼女の両肩をガシツと掴んだ。

「それじゃダメなんです・・・それだと、僕はあなたと向き合えてないことになる・・・。

いいですか、オグリさんはオグリ以外の何者でもないんです。

僕が見ているのは、ユナさんではなく、オグリさんそのものです・・・。

ああ、すみません・・・上手く言うことができなくて・・・。

はつきり言えるのは、僕がオグリさんをユナさんの代わりにしちやダメだということ
です。

だから、オグリさんもユナさんの代わりにしろうとしないでください」

「・・・そうか、わかった」

そう言うのと、今度は彼女の方から抱き着いてきた。

「仲直りのハグだ。朝はタマモと一緒に平手打ちしてすまなかった。

どうしても君の幼馴染への嫉妬を抑えられなかったんだ・・・」

「・・・謝るのは僕の方ですつてば」

尊い空気が廊下に漂った。

その空気がグラウンドまで運ばれたことで、例の二人は復活した。

そして、数秒後に二人仲良く尊死した。

一方、そのころカフェテリアでは・・・。

「アンタ、またスマホなんてして！」

いい加減、そんなものに金注ぎ込むのやめなさい！

タマモちゃん卒業したら、アンタ間違はなく早死にするよ！」

「うわああああああ！課金は俺の人生なんだあああああ！」

「おめえはとつとと誰かい女見つけて落ち着きやがれつてんだ！」

ずっと独身で、トレーナー退職した後どうすんだ！」

「ぎゃあああああ！どうして俺もなのとおおお!!」

金課と綾秀が商店街の面々にリンチされていた。

そして、奥瀬川はというと・・・ネイチャに引きずられていった。

翌日のトレーナーミーティング・・・

「告知ッ！綾秀トレーナーおよび金課トレーナーは怪我による入院で欠勤！」

祐樹トレーナーのここ数か月間の無断欠勤は不問と処す！

ただし、ナイスネイチャとのうまびよいの発覚により、減俸処分！」

「えっ」

芦田は状況が呑み込めず、ハトが豆鉄砲くらったような顔になった。

タキオンのワクワクお薬タイム!

「ぬわああああああん! トレーナーくうううん! 寂しいよおおおおお!」

タキオンは実験室で一人ゴロゴロしていた。

彼女のトレーナーの綾秀が入院してしまったからだ。

弁当を届けてくれる人もいなければ、実験台になる人もいない。

それで彼女は抱き枕を抱えてゴロゴロしていたのだ。

そこにカフェが入ってきた。

「・・・はあ」

「入ってくるなり、何だい!! その溜息は!」

「・・・」

「やめろおおお! 私をそんな目で見るなあああ!」

「研究はどうしたんですか、恋愛クソザコナメクジウマ娘さん」

「ぎゃあああああ!」

「というか、看病しに行けばいいじゃないですか」

「・・・そのことなただけだね、あちこちに聞いたんだよ」

「聞いたって?」

「トレーナーくんの入院してる病院をね。そしたら、バラバラの答えだったよ」

「・・・なるほど」

何かあつてはいけないので、入院先は誤魔化されるのだ。

「それに、最近は仕事の依頼が減ってしまったし・・・」

「ああ、リベリアからの・・・」

「そう、リベリアからの仕事が減ってしまったんだ。」

あのときは発情薬を作つてはがっぼがぼだったんだけどねえ」

リベリアは世界でも先駆けて政府ぐるみでトレーナーとウマ娘の恋愛を応援している国だ。

愛に応えようとしないうトレーナーに”楽園送り”という刑が科されるくらい応援している。

まず、トレーナーをマダガスカルの砂丘に設置された高台から突き落とす。

遠くまで走つたのを確認した後、ウマ娘たちは自主的にタキオン印の発情薬を注射する。

それにより暴走した彼女たちは一直線にトレーナーをうまびよいしに向かう。

ウマ娘より遅いトレーナーたちは結局そこで一生生涯幸せに暮らすを終える。

それが”楽園送り”という刑の内容であった。

この意味がよくわからない刑はマダガスカル政府からの強い抗議で中止された。そういうわけで、発情薬の需要は大きく失われてしまった。

なお、マダガスカルは最近まで人間とウマ娘が唯一共存できていない国家だった。人間たちは三重の壁に囲まれてなんとか貞操という名の尊厳を維持していた。

・・・が、最近、リベリア政府からの刺客であるトレー（ライ）ナーによつて扉が全部破られた。

既婚者には何の害もなかったが、独身者及び子供たちは食われた（意味深）

こうして束の間の楽園は無事に崩壊した。

「また、優良顧客を探さなきゃね・・・」

そこに、芦田が入ってくる。

・・・目の下のクマがとてつもないことになっていた。

「タキオンさん、僕が24時間働ける薬をください」

「うん、帰れ。そして寝ろ」

「じゃあ、僕が一日中オグリさんの面倒を見ていられる薬を・・・」

「同じだ同じ」

プスリ

「・・・代わりに、君の体力が回復^睡する薬^薬を打ち込んだよ。

それで健康になった君はオグリくんの面倒をちゃんと見れるはずだ」

「ええ、それがいいですね。あの視線が・・・悲しそうでしたから」

「ああ、例のね・・・」

♪（ドラクエの宿屋の効果音）

「ぬわああああああん！トレナーナーくうううん！寂しいよおおおおお！」

「それ昨日も言っていましたよね？」

「あと八回ぐらい続けるつもりだからよろしく」

「どこの現実改変女子高生の夏休みですか？」

何がとは言いませんが、そこまで内容がもちませんよ」

「ぶつちやけ、本当にリベリアくんが何もやらかさないから暇なんだよね」

つい最近までこの世界のリベリアは色々とはつちやけていたのだ。

戦争のときに、敵の要塞に未婚のウマ娘を送り込んだり・・・。

それでなんやかんやで領土を着々と拡大していったのだ。アフリカ全土くらい。

なお、その時の強化薬やら睡眠薬やら発情薬やらは全部タキオン印だった。

ウマ娘の世界も決して平和というわけではないのだ。

「失礼する」

オグリがお腹をさすりながら入ってきた。

「失礼するなら帰ってくれ」

「食欲を抑える薬はないか？おっと、性欲に向かうとかそういうのはなしだ」

「あのトレーナーにして、このウマ娘ありか。」

よく寝てればきつと太り気味は解消すると思うよ（適当）」

プスリ

♪♪（ドラクエの宿屋のry）

「ぬわ」

バシヤツとアイスコーヒーがタキオンの顔にかけられる。

「なにをするだー！パソコンで仕事なんだぞ！」

「そろそろ飽きられますよ。というか、病院特定しに行こうという気はないんですか？」

「夜にこっそり会いに行つたよ。そしたら、病院の入口で緑の悪魔が待ち構えてた」

「それはぎぎぎ愁傷様ですね」

「今、ざまあと言おうとしなかった？」

「そんなことより、仕事とは珍しいですね」

「・・・まあ、今度はマダガスカルの方からね」

「へえ、どんな仕事ですか？」

「この前、複合同時ワクチン作っただろ？あれの治療薬バージョンさ。」

壁を解体したのはいいものの、どっさりアスベストが含まれていてね」

「あらま」

「しかも、地下都市やら下水の未発達やらで最悪なレベルさ。」

だって、どういうわけか壁内が近世ドイツとかいうふざけた状況だったし」

「それはそれは・・・」愁傷さまで」

「しかも、解体した影響でアスベストがアフリカ中に蔓延したし・・・」

なお、余談だがリベリアはそれにより獲得した領土の大半を放棄した。

アスベスト塗れの土地で再びかつての独立国家が復活していったのは別の話。

「とりあえず、データを色々な場所に送らないと・・・」。

さすがに今回は需要がたくさんすぎるから私一人では無理だ。

それに、ようやくいい優良顧客が手に入ったから頑張らないとね」

「どんな顧客ですか？」

「確かマナによる慈善なんか・・・」

その時、芹田とオグリの二人が入ってきた。

「おや、今度はずつと二人一緒にいられて食欲を抑えることのできる薬か?」

「いえいえ、この前のお礼です。お弁当と一緒に作ったんです」

「ほう、ありがたいね・・・最近、お弁当を食べた覚えがなかったから・・・」

(タキオンさん・・・)

(・・・何だい?)

(例の視線をまた感じました)

(ああ、今度はどんなだい?)

(憐れむような感情を感じます)

そして、それがなぜか私たちに・・・)

(はあ?)

「あつ、これ以上お時間取らせてはあれなので、そろそろ出ますね」

「ありがとう、タキオン。さあ、アシダ、余ってしまった料理を食べよう」

「ええ、そうですね。作りすぎちゃいましたから・・・」

こうして二人は出ていった。

「・・・カフェ、君にあげるよ」

「いやいや、あなたが食べるべきですよ」

「……」

二人は覚悟を決めた。

二人で一緒に弁当包みを開けた。

♪♪（呪いの装備）

「えっ、これ呪い扱いなのかい？」

「捨てたほうがいいかもしれませんがね」

それをすてるなんてとんでもない！

「……覚悟を決めるのかなさそうだね」

「ええ、あなたと友達でいられて、まあまあ楽しかったです……」

弁当箱を開けると、中は普通においしそうだった。

そして、いい匂いもした。食欲がそそられる。

「なんだ、杞憂だったみたいだね」

「そうみたいですネ」

♪♪（全滅）

「主治医さん、どうしてオグリさんは倒れたんですか?!」
「メシマズです」

余談だが、この世界でもタキオンの新しい優良顧客はエチオピアでやらかした。
エチオピア国民はキレイに思う。

デート見守り隊、出動！

ある夜、オグリは滴る水音を聞いて目を覚ました。

窓の外からではないので、雨ではないようだ。

それは隣のベッドで寝ているはずのタマモの方から聞こえてきた。

「うう……トレーナーのばかあ……ウチの気持ちを知らんで……」

水音と彼女の艶やかな声が入り混じる。

邪魔しては悪いと思い、再びオグリは寝入った。

「……つてことが昨日あったんだ」

「へえ、そうなんですか。タマモさんがそろびよいしてたんですね」

「誰かウチを殺してくれ」

「死んだら試合終了ですよ、タマモさん」

「アンタの担当バがウチを社会的に殺してくれたやないか。」

「どうしてくれるんや、この静かな祝福の視線を」

「でも、タマは金課トレーナーのこと好きなんだろう？」

「そ、そうやけどお……べ、別に監禁してうまびよいしたり、温泉に行つてうまびよい

したり、海でうまびよいしたり、トレーナー室でうまびよいしたり、実家でうまびよいしたり・・・なんてことぜっんぜん考えてるわけないで!」

「ほう、そこまで俺とうまびよいしたいのか」

彼らの背後にズアツという効果音が似合うポーズをした金課が立っていた。

「だが断る!」

彼は叫びながら課金した。

「俺の前にはこの果てしなく長い課金道が待ち構えている!」

お前に、その険しい道を歩ませるのを強いるわけにはいかないのだツ!」

そこで芦田は金課の持っていたスマホにデコピンした。

スマホは粉になった。本当に砂のようになってしまった。

「ば、ばかなっ!」

「金課さん、ここでタマモさんと向き合わないと、奥瀬川りますよ」

「た、確かに、奥瀬川るのは嫌だツ!だがツ、俺の課金道を妨げた罪は大きい!

お前がスマホを壊したことで、永遠に失われたデータもあるのだツ!」

「ぼくの名前を勝手に動詞にしないでくれるか?」

「・・・金課さんは今まで課金した額を覚えていますか?」

「一億からは覚えとらんな」

「うそやろ？えっ??冗談よな??」

「僕は覚えていますよ・・・0円です」

「そうか・・・ならば、無課金ごときが俺に勝てると思わないことだッ！」

二人の拳が激突する。

その衝撃波で、スペシャルウィークの食事が雲散霧消した。

殺気をすぐに感じ取った芦田はすぐに逃げた。

「ははは！すぐに逃げたか！どれだけ強かろうと、所詮は無課金・・・！」

「勝ち誇っているところすみませんが・・・生かしてあげません！」

「なにいつ」

金課はモザイクをかけなければいけないほどの惨状になった。

「さて、次は芦田さん・・・逃がしてあげませんッ！」

そんなこんなで金課は新しいスマホが必要となった。

そこで、節約に詳しいタマモと一緒に行くことになった。

「まあ、これが最初のデートみたいになって上手くいくことを祈りましょう」

「そうだな・・・」

アシダとオグリはそんな二人を遠くから見守っている。

彼らは今、カフェのテラス席でコーヒーを飲みながらまつたりしていた。

「ところで、アシダはスペから逃げ切れたのか?」

「逃げ切れましたが・・・まだ向こうは僕のことを追いかけているようですね」

彼の視線の先には、殺気を隠しているスペがいた。

彼女は巨大チョコケーキをもぐもぐと幸せそうに食べている。

・・・殺気を隠しながらではあるが。

「うふふ・・・」

「・・・背筋がぞわつとします」

「諦めてボコられたほうがいいかもしれないぞ」

「嫌ですよ。それだとオグリさんとしばらく一緒にいられないじゃないですか」

「私からも一緒に謝るから安心してく・・・あれは許してくれそうにないな」

「でしょ?だから、いつまでも逃げるしかないんですよ」

「だったら、私が守ってあげるから・・・安心してくれ」

オグリはそう言つて彼の腕にしがみつく。

その日、カフェにいた他の客たちは全員糖尿病になった。

ネットでは後にこういうミームが生まれた。

また彼何かやっちゃいました?

そうこうしているうちに、携帯ショップが爆発霧散した。

これだから英雄社は……。

彼らは次に悠久可動社の店に向かう。

アシダとオグリもそれに合わせて尾行する。

スペシャルウィークも殺気を隠しながら尾行する。

「たぶん、次の店で買うと思いますね」

「ああ、悠久は英雄よりかは良心的だからな（経験談）」

「……これ、訴えられませんよね？」

「多分大丈夫だ」

二人の予想通りであった。

数十分もすると彼らは上機嫌で出てきた。

「よし……これでまた課金道に……！」

「まだダメや。ウチにご褒美あげてからや！」

あと、帰るまでスマホ禁止！

「えー……」

「家に帰るまでスマホ我慢できないのに課金道極めれると思つとんの？」

「……よし！そこまで言うなら我慢してやろうじゃないか！」

それで、お前が欲しいご褒美ってなんだい？」

「・・・ぴよいや」

「えっ?」

「うまぴよいや!もちろん、踊る方やない!」

彼女は顔を赤くしながら叫ぶ。

「えっ?オグリさん、どういうこと?」

「間違いない・・・これは逆うまぴよいを決めるつもりだ」

「逆うまぴよい・・・なんか嫌な予感しかしませんね」

「ああ、金課トレーナーの貞操が散ることになる」

「うーん・・・いせかいのぶんかってすごいですね」

「アシダの頭が止まってしまった・・・」

さて、さすがの金課も戸惑っている。

「えっと、タマモさん・・・俺たち、そういう関係になってはいけないんだと思います。

というか、トレーナーになってから気付いたんですが、課金って性欲制御に役立ちますよね」

「そんなの腐った制御方法や。さあ、いくで!

スマホゲーなんかより、ウチとのうまぴよいの方がが楽しいって思い知らせてやる!」

「やだっー！減俸処分になんかなりたくないっ！」

「別にええやろ！その分、課金に使わずに済むやんか！」

タマモは彼を多目的トイレに向かって引きずっていく。

「ま、まずいですよ！」

「どうしたんだ！アシダ!!」

「いえ・・・なんか猛烈に嫌な予感がしてきましたんです！」

このままでは、何のとは言いませんが二の舞になりかねません！」

「な、何を言っているのかわからないけど、私も背中が寒くなってきた・・・！」

だが、もはやすでに手遅れだった。

彼女は多目的トイレの扉を開けると、急に固まった。

その後、金課と一緒に赤面しながらその場をそそくさと去った。

「・・・どうやら既に先客がいたようですね」

「そうか・・・」

しばらくすると、奥瀬川とネイチャが赤面しながら出てきた。

奥瀬川の方は少しやせていて、ネイチャはちよつと股を抑えていた。

「・・・見なかったことにしましょう」

「ああ、そうだな」

とりあえず、尾行を再開する。

金課とタマモは屋台などで食べ歩きをしていた。

なお、どの店にもオグリの顔写真が貼られていた。

ご丁寧にWANTEDという文字付だった。

「……オグリさん?」

「……」

ふいつと目を逸らす。

だが、その視線の先に芦田が高速移動して、目を合わせてくる。

「オグリさん?」

「……」

だが、いくら誤魔化そうともお腹の音は誤魔化せなかった。

そして、それはスペシャルウィークのお腹も同じだった。

よく見ると、彼女の顔写真も貼られていた。

「……そこで少し待っていてくださいいね」

そう言つて彼は焼き鳥を何本か買ってきた。

それをオグリに渡した後、スペシャルウィークにも渡した。

「……これでこの前の恨みの四百分の一は帳消しにしてあげます」

「あと、399も残っているんですか・・・」

「当たり前ですよ？まだ許してあげません！」

「・・・アシダ、何か様子がおかしい」

「えっ、金課さんたちに何かありましたか？」

「いや、奥瀬川トレーナーの方だ」

「えっ・・・ああ、確かに」

二人は奥瀬川を尾けているものたちがいるのを発見した。

「えっと・・・私には普通に人が歩いているようにしか見えませんが・・・？」

「そうだろうな。私はアシダと一緒にいるようになってから鋭くなっただが」

「僕は最近、そういう勘は鈍りましたがね・・・やばいですね、殺気強すぎますね」

彼は一本だけ残った焼き鳥を一気に頬張り、串を武器代わりにする。

「オグリさんとスペさんは金課さんの尾行を続けてください。」

僕は奥瀬川さんの方にちよつと行ってきます」

「ああ、無事を祈る」

「あつ・・・頑張ってくださいね・・・」

こうして芦田は奥瀬川とネイチャの方に急いだ。

「・・・大丈夫ですかね」

「さつきまで殺そうとしてたのに心配するのかわ？」

「それとこれとは話が別ですよ．．．それにしても、どうして奥瀬川さんが．．．」

「ああ、不思議だな．．．」

本当のことを言えば、オグリはその理由を知っていた。

アシダが奥瀬川の話および金課の関わりを話してくれたからだ。

実のところ、記録によれば、金課はまさに“理不尽”を体現した存在だった。

たとえば復讐しようとしても、失敗する上に、もっと酷い報復が待っている。

ウマ娘フアンの間では、現代のラスプーチンと呼ばれるほど頑丈らしい。

一緒に記録を見ていた芦田は彼みたいにはなれないと嘆息した。

オグリとしては金課みたいになられては困るのだが。

まあ、今回連中が奥瀬川を狙ったのも、金課にはかなわないと踏んでのことだろう。

それと、昔のことに關しての奥瀬川に対する逆恨みもあるのだろう。

だが、これはオグリも気付かなかったのだが、樋渡史も奥瀬川を守ろうとしていた。

当然、彼の相棒であるデジタルも一緒だ。

芦田、樋渡史、デジタルは互いの存在に気が付くと、すぐに連携を開始していた。

すでに連中に勝機などこの時点でなかったのだ。

「さて、タマは．．．そんなバカな!!金課トレーナーが課金以外にお金を使っている!!

そんなことはありえないはずだ……！タマのためにネックレスだと……！
「金課トレーナーにあまりに失礼じゃ……いえ、確かにそうですね」

「た、タマがすつごく蕩けた顔してる！」

首にネックレスかけてもらって……顔が近づいた瞬間を狙ってキスした！

いいぞ、タマ！その調子だ！それでゴールインまで……」

「あわわ……／＼／＼」

だが、そこまで行くことはなかった。タマモが気絶したからだ。

金課は苦笑しながら、彼女をおぶっていき、去っていった。

「さて、アシダは……」

振り向いてみると、色々と混沌としていた。

まず、奥瀬川を害そうとしていた連中は当然のごとく全滅していた。

モザイクかけないといけなくらいには全滅していた。

奥瀬川は負傷しながらも、ネイチャを抱きしめていた。

ネイチャはもう二度と無茶しないで言いながら抱きしめ返す。

樋渡史とデジタルはポロポロになりながらも、その光景を見たことで静かに死ねた。

さて、我らが芦田が一番傷を負っていたし、返り血もたつぷり浴びていた。

彼は二人を邪魔しないように静かに立ち去り、オグリのもとに戻っていった。

スペシャルウィークはそんな彼の姿が近づいているのを見て、気絶してしまった。

「さて、尾行の続きでもしましょうか」

「トレーナー、二人は帰ったぞ」

「えっ、そうなんですか・・・じゃあ、僕たちも帰ってトレーニングでも・・・」

「まずは病院に行つたほうがいいと思うぞ」

「えっ、でも・・・僕はオグリさんと一緒にいたいですし・・・」

それに、これくらいの傷は放っておいたら治りますよ」

「病院に行こうか？」

「・・・」

彼は地面に仰向けになり・・・手足をじたばたさせた。

そう、古谷の真似だ。これで押し切ろうというのだ。

だが、すぐに彼は駄々をこねるのをやめた。

それもそのはず。芦田は満身創痍の体でじたばたしてしまつたのだから。

「・・・腕がすごく痛いです」

「一緒に病院に行こうな、アシダ」

ドツキリ大作戦大失敗！

「入院してください」

「はい」

そういうわけで、芦田は病院への入院が決定してしまった。

両腕の骨にひびが入っていたりとか、様々であった。

まあ、安静にしていれば治るとのことだった。

芦田のことなので、安静にしないだろうから入院措置が決まったが。

一方そのころ、トレセン学園では……。

「ぼつくぼつくぼつくしゅん♪」

サクラバクシンオーのトレーナー、花山徹が上機嫌で歩いていた。

とくに理由はない。彼はいつも上機嫌なのだ。

バクシンオーがレースで負けると、自分の無能さを呪って自殺しようとするが。

なお、そのたびにロープが急に千切れたり、毒が古くなったりで失敗する。

「ドツキリですかー」

会議室の前を通ると、彼女の大きな声が聞こえてきた。

「いや、聞こえるぞー!」

ルドルフの叱咤する声。

「(ぎょ)めんなさーい!」

徹はこっそりと耳をすまます。

「……(ぎょ)ほん、再度説明ッ!

今回はおもしろそ……もとい、トレーナーとの交流を兼ねてドッキリを仕掛ける!」

本音が聞こえたような気がしたが、気のせいだろう。

「もちろん、中には関係を壊しかねない内容もある!」

「えー……ボク、トレーナーと仲悪くなりたくないよー……」

「承知ッ!しかし、逆に考えればよい!雨降って地固まると!」

「なるほど……ボク、頑張ってみるよ!そして、カイチョーより先に……うへへ」

徹は心の中で古谷に合掌した。

「それでは、ドッキリ内容を配るので、一人ずつ来てくださいな〜」

たづなの指示で一人ずつウマ娘が動く。

「なんと!私は契約解除ドッキリですか!」

バクシンオーの大声再び。

徹はそそくさとその場を離れる。

これは面白い。逆ドッキリを仕掛けられる。

なるほど、契約解除か・・・ならば、こちらからは特別移籍はどうだろうか？

(・・・うん？関係を壊しかねない？)

これは他のトレーナーにも知らせた方がいいかもしれない。

下手すれば、本当に関係が壊れてしまうかもしれない。

こうなつては理事長のせつかくのアイデアも台無しになつてしまう。

こうして徹は先輩の英一郎に報告した。

英一郎はその報告を受け取ると、綾秀にも連絡した。

綾秀から、病院にいる芦田。芦田から金課。

ここまでは正確に伝わった。だが、ここで金課がふざけた。

彼はなんやかんやして、伝言ゲーム特有の不正確な伝達を実現しようとした。

そして、彼の次に受け取ったのは古谷だった。

子どもっぽい古谷はあっさり和金課の罠にはまった。

ここから、だんだんと情報の誤伝達が永遠に繰り返されていく。

だが、そんなことも露知らず、徹は特別移籍ドッキリの準備を考えていた。

「うーん・・・俺なんかより芦田のほうがいいって言っべきかな」

だが、そのつぶやきが、彼自身を不安にさせた。

実際、そうなのでは？確かに育成は順調に進んでいる。だが、こつぴどく負けることだってある。

もちろん、芦田の担当バのオグリだって負けることはある。

でも・・・これからの可能性に溢れているのは最若手の彼に違いない。

「・・・ごめんな、バクシンオー」

彼は慣れた手つきでロープを天井から吊るした。

バクシンオーがドッキリをかますために突入したときはもう首をかける直前だった。

彼女は慌てて彼を地面に押し倒す。

「・・・バクシンオー、悪いことは言わない。

その契約解除ドッキリを、今すぐ現実にするんだ。

俺にはもう、君をこれ以上成長させることができない・・・。

もう君は立派なスプリンターだ・・・。

それなのに、俺は・・・」

「トレーナーさん・・・知っていますよ。

私のために、1200mのレースで勝てば3600mのレースで勝つたのと同じだっ

て嘘ついたこと」

「えっ？」

「何だつて知っていますよ、トレーナーさんのこと。

芦田さんの記録を見て、ずっと羨望していたこと。

私が負けた日の夜に、自分の命を絶とうとしていたこと。

その度に学級委員長たる私が阻止してきましたが！

あと、立ち直るたびに私でそろびよいしていたことも……。

そして、トレーナーさんの息遣いも足音だつて……何だつて知っています。

今日の極秘会議、こつそり聞いていましたよね？」

「……」

彼は思い知った。すべては彼女の掌の上だったのだと。

そして、再び自分を恥じた。

彼女に必死に隠そうとしていたことが、すべて彼女に知られていた。

もうトレーナー失格だ……。

「……でも、もう大丈夫ですよ。

トレーナーさんの抱えてたものは、これからは二人で一緒に抱えましょう！

どんなに重い荷物も、二人で協力して運べば軽くなりますよ！」

「……本当に俺みたいなのやつでもいいのか？」

「ええ、もちろんですよ！」

・・・でも、お仕置が必要ですよね？

だって、私に今まで嘘をつけて誤魔化してきたんですから！」

彼女は徹のシャツを破り捨てる。

「・・・つと、その前に他の子にも連絡しなくてはいけませんね！」

トレーナーさんのことですから、他の人たちにも知らせちゃったはずです！

さて、そのことも含めてお仕置きするので覚悟してくださいね♡」

徹は抵抗しなかった。

素直に彼女の好意が嬉しかったのもある。

だが、それ以上に彼女にずっと辛い思いをさせてきた後悔の念からでもあった。

数分後・・・

連絡を受け取ったオグリは青筋を立てた。

押し倒しドッキリをするはずだった彼女は病院の前に立っていた。

だが、目を疑うような光景が広がっていたのだ。

病院の周りが完全にバリケードで囲まれていた。

入院していた他の患者たちが職員たちの優秀な指示のもとに避難していた。

だが、その中に芦田の姿はなかった。

「バ、バイオハザードです！」

もうすでに演技つぽかった。

「……院長、どういうことだ？」

「タキオンさんの薬やその他の薬によつて、芦田トレーナーが突然変異を起こしました。現在、患者の避難および芦田トレーナーの鎮圧が実行されていますが……もう限界です！」

これ以上の被害を防ぐためには、彼を射殺するほかありません！」

冷静に考えると、もうドツキリだとわかるものだった。

そして、オグリは怒りながらも冷静だった。

「……アシダ、少し、頭冷やそうか」

そう言うや否や、オグリは病院に突入した。

そして、芦田の悲鳴が響き渡ったのはそれから数秒後のことだった。

彼の用意していた逆ドツキリ大成功！のプラカードは真つ二つに割られた。

こうしてウマ娘およびトレーナーからのドツキリは失敗に終わった。

だが、この騒動はここで終わらない……。

余談だが、誤伝達は最終的に「ウマ娘へのプロポーズ」というものに変わっていた。

これを真に受けたマチカネフクキタルのトレーナーはすぐに婚約指輪を購入した。

結果的にフクキタルの乙女心は「ドツキリ」させられたといえる。

こうしてトレセンでまた一組のカップルが誕生した。
めでたしめでたし・・・

「報告によると、全てのドッキリが失敗したようです・・・」

「激怒ッ!」

・・・つづく

理事長は相当カツカしているようです

ドツキリ大作戦は大失敗に終わった。

翌日のミーティングではずっと理事長が沈黙していた。

なお、徹とフクキタルのトレーナーは休暇を貰った。

古谷は土器を作ろうとして曜変天目を作ってしまったので、静嘉堂文庫に誘拐された。

そして、終わりごろに、いつも付けてない眼鏡を外しながらやよいはこう言った。

「四名だけ残れ。綾秀、芦田、睦月、アンボンタン金課」

「えっ」

彼らはとくに逆ドツキリやら関連行為が酷かったのだ。

睦月に関しては、スカイと一緒に釣りに行っていた。

ドツキリという本来の目的やら業務やらトレーニングやらをすっぽかして。

こうして他のトレーナー、教員、たづなは出ていった。

四名と理事長だけ残されたあと、沈黙が続く。

そして、その沈黙は理事長が破った。

「企画したのに！トレーナーにドツキリを仕掛けると！」

いつもの感じではなかった。

「ホルシチ私の一企画に背くとはけしからん」

怒鳴り声は室外まで響いた。

「その結果がこれだ」

外にいたデジタルは泣き出した。

「トレーナーの嘘つきども！皆、？をつく！SS（怪文書）でもそうだった！」

理事長は突然、電波を受信したかのようなことを叫ぶ。

「トレーナーはどいつもこいつも——下劣な臆病者だ！大ッ嫌いだ！」

「理事長、それはあまりの侮辱です」

芦田がそう言うが、理事長の怒りは収まらない。

「西鉄大嫌いだ！あいたたバカ！臆病な負け犬、裏切り者だ！」

「いくら理事長でも……」

綾秀が耐えかねて言おうとすると、理事長がすぐに遮る。

「トレーナーどもはドイツ人のクズだ！」

「（（いや、日本人ただけ……））」

「畜生めええええええ！！恥さらしだ！」

大音声。

「トレーナーとは名ばかり。育成学校で学んだのは……」

「〔育成学校出ていません〕」

「……いつもトレーナーは私の計画を妨げる」

デジタルはハンカチを取り出し、泣き続ける。

さすがの怒声にオグリも心配そうに部屋の前によつてきた。

「あらゆる手を使い——私を邪魔し続ける！」

「I！ S 判断力足らんかった私もやるべきだった……！」

トレーナーの大粛清を先代のように！」

そう叫ぶと、彼女は力が抜けたように椅子に座る。

「私は育成学校など——出てはいないが、それでも独力で——理事長になったぞ」

彼女はなおもまくし立てる。

「裏切り者ども……奴らは最初から私を裏切り、おっばいぶるんぶるんだまし続けた！」

ウマ娘への恐るべき裏切りだ！だが見てるがいい……償ってもらうからな！」

泣き続けるデジタルを樋渡史が慰める。

「デジタルさん、泣かないで……」

少しの沈黙が続く。

「私の命令は届かない。終わりだ・・・」

こうしてお説教は終わった。

「・・・うう」

「ほら、アシダ。しっかりしてくれ」

お説教を受けていた四人はすっかりげんなりしてしまっていた。

芦田はオグリに肩を抱えられて、何とか歩いていった。

「すみません・・・あんな逆ドッキリをしてしまい・・・」

「いいんだ、次から気を付けてくれたらいい。」

・・・というか、よく協力してくれたな、病院側も」

「院長さんがオグリさんと僕のファンだったようです」

「そうか・・・アシダは人気者だな」

「オグリさんのおかげですよ。」

オグリさんが一生懸命頑張ったからなんです。

僕はただ、それをお手伝いしただけです」

そう言った瞬間、アシダの頬がむにゅとつねられる。

「そんなことを言わないでくれ。」

君がいたから、私も成長できたんだ・・・。

なあ、アシダ、君が来た日のこと覚えているか？」
忘れるはずもなかった。

あの日は芦田にとって、大事な日だった。

「ええ、もちろん」

「そのときの信用してらるって言葉もだな？」

「はい。あの時は初対面のオグリさんがそう言ってくれたことが嬉しかったです」

「・・・でもな、本当は不安もあったんだ。」

いきなり現れた君がトレーナーになるなんて・・・。

それに、まだ高校生ぐらいっていうのも余計に不安だった」

「ですよねえ・・・」

「でも、今は違う」

そう言うのと、急に抱き着いてきた。

「仲直りのハグ。これは君を信頼している証だ。」

私と一緒に頑張ってくれた君にだからこそ、こういうことができるんだ。

昨日はすまなかった。あんなに怒ってしまつて」

「いえいえ、僕の方こそ・・・」

そう言つて、芦田の方からも抱きしめる。

樋渡史とデジタルは幸せに死んだ。

そんな彼らの渾名は『死ねば美青年&美少女』。

「ほわあああ、あたし幸せですうう・・・」

「刻が見えるよ・・・」

「・・・でも、あの視線が今日は何だか悲しそうとか怒っているというか」

「そうだね・・・まるで彼氏をNTRた女性のような視線を感じるよ・・・」

今日も一部の者のみ感じられる視線が芦田を見つめていた。

その視線には怒りと悲しみが籠っていた。

タキオンがその話を聞いて、新薬の製造を始めたのはまた別の話・・・。

「それはそうと、今週はアシダをこき使えと理事長から言われているんだ。」

さつき仲直りしたのとはまた別問題だ。これからの一週間も頑張ろうな」

「えっ」

ウマ娘の異常な発情またはいかにしてぐっすり二人が 眠っていたか 前編

タキオンの研究室

「すまないね、トレーナーくん」

「まったくだよ。突然、朝っぱらから呼び出すなんて。」

「こちらで一週間こき使われて疲れてるってのに。」

「なんか学園内の空気がやけにピンクっぽいのと関係あんのか?」

「綾秀の言う通り、今日はやけに学園内の空気がピンク色に染まっていた。」

「まるで、何かのガスが漏れ出たかのようだった。」

「ああ、大いに関係あるね。うっかり気化させちゃってね」

「ふーん……」

「ふーんって……」

「だって、俺とお前生きてるし、生命に関わるような代物じゃないんだろ?」

「そうだけどさあ……」

彼はいつも実験台になっていたので、感覚が麻痺しているのだ。

たまに三途の川を見ることもあったので、なおさらだ。

「それで、このガスは一体何なんだ？」

「発情薬。ついやつちやつたんだ」

「そうかそうか・・・社会生命に関わるじゃねえか、この野郎」

「ごめんごめん」

「それで、解除薬作ったから、俺に何とかしろって言うのか？」

まあ、お前は正気そうだし、何とかなるかもな。

いつも実験やっているから耐性付いてるだろうし」

「私が平気だって、いつ言ったんだい？」

「えっ」

「よく考えてみなよ。そんな簡単に耐性付いたら、イーブルの戦いは悲惨にならなかつたよ」

「確かに・・・待て、じゃあ俺を呼んだのって・・・」

「そういうことさ♡誇っていいぞ、これは私が君を信頼している証拠だからな♡」

「な、何を信頼しているのかわかりたくない！責任取りたくない！」

綾秀は急いでドアノブに手をかけたが、開かなかつた。

「無駄だよ。そのドアは私のどうぞという声にしか反応しないのだ」

ドアへガチャッ

「なんだ開いてんじゃん！それじゃあ！」

そのまま彼は逃げ去ってしまふ。

「……これは予想外だったね。まさか今の一言でも反応してしまうとは。

まあ、逃がさないから諦めたまえよ……トレーナーくん……♡」

芦田の部屋

芦田は一週間の苦役が終わると、すぐに眠ってしまった。

それもトレーナー室のソファで。

仕方ないので、オグリは彼を部屋に運んでいった。

彼の部屋は相も変わらず退廃的に散らかっていた。

そして、彼女もついうっかり添い寝して、眠りに落ちてしまった。

それが昨晚のこと。二人はまだ寝ていた。

部屋はちゃんと閉められていないので、ガスは当然入り込んでくる。

そして、眠っているとはいえ、オグリもばつちり影響を受けてしまった。

まあ、眠っているのです、芦田の指を咥え始めただけで済んだのだが、
ともかく、二人はぐっすか寝ている。

カフェテリア

それは見る者によつては世界の終わりに違いなかつた。

女学生たちが発情し、男性を襲っているのだから。

そんな光景を前にしながらも、英一郎は紅茶を優雅に飲んでいた。

もちろん、いつもの園児服という着こなしであつたが。

「おやおや、まさか週末よりも先に終末が来るとは」

「おや、クリークくんのトレーナーか。」

今のネタ、私にも貸してくれないかい？」

隣の席に座ってきたのはルドルフだつた。

「古谷くんは襲わなくてもいいのかい？」

「最初は襲おうと思つたんだがね、どうせいつものようになると思つて……」

「なりそうだね」

「案の定、テイオーと一緒に駄々をこね合つてたよ。」

「……ところで、この床に縛られて転がっている桐生院くんはどういうことだい？」
「芦田くんの部屋のドアをピッキングしようとしてたんだ」

芦田の部屋？

芦田は奇妙な夢を見ていた。

まず特徴的なのが、それが夢であるとすぐに自覚できた点。

そして、明晰夢だとわかっているのに、好きなようにできなかつた点。

ここは故郷だった。前にいた世界だった。

「頬をつねっても痛くないから夢なんでしょうが……」

やけに静かだった。普段だったら人が行き交う街なのに。

見たところ、ゴーストタウンになってからそれほど経っていないようだった。

別に核戦争が起こって放射能に包まれたわけでもなさそうだった。

野良猫やら野良犬が普通に街を闊歩していた。しかも、以前よりも数を増やして。

トレーナーになった後に読んだ『渚にて』という小説では放射能で北半球が全滅していたが。

「……事実は小説よりも奇なり、ですな」

金課のトレーナー室

「なあウチとヤろうや！」

「入ってきて第一声がそれとか乙女としてどうなんだ？」

「こんなうら若き乙女にこんなこと喋らせるアンタが悪いんや！」

「さあ、無駄な抵抗と課金はやめて、ウチとうまびよいするんや！」

「課金による加速は無駄じゃないんだ！」

「あつ、いいこと思いついた！」

その瞬間、とんでもなエネルギーが金課から放出された。

「な、なんやこの気は・・・！トレーナーにしがみつくだけで精一杯や！」

「ふはははは！俺はこの前行った世界に逃げるぞー、タマモ！」

「そ、そんなことはさせへん！ウチもついてく！」

「えつ、それはちよつとおすすめしないというか・・・。

あの世界、ちよつと歩いただけでどんよりとしているというか・・・。

いや、一部の変わつた力を持つ女の子たちは例外だけ・・・。

とにかく、あまり寛容じゃないというか・・・芦田が例外みたいなもんで・・・。

下手すると、お前があまりいい目で見られないというか・・・差別されるといふか」
「そんな時はそんな時や！ウチとトレーナーはどこまでも一緒や！」

「やだ！小生こんなのやだ！」

空間がガラスのように割れた。二人は穴に落ちていく。

そして、二人は気が付けば大都会の真ん中にいた。

・・・人の死体がそこら中に転がっていたが。

生きている人は、どこにも見当たらなかった。

「・・・うーん、差別する人間自体がいなくなっていたとはたまげたなあ」

「アンタがこの前ウイルス持ち込んだんちゃう？それで・・・」

「えっ、俺が原因でこの世界滅んだの？」

芦田の部屋

指を舐め終えたオグリは、今度はアシダの首筋をはむはむしていた。

もちろん、寝ながらである。

後編につづく

ウマ娘の異常な発情またはいかにしてぐっすり二人が
眠っていたか 後編

校門前

「これはひどいでやんすね・・・」

「どうするですか、お兄ちゃん？」

「戦略的撤退でやんす」

「了解です。ボクもこんなズツコンパソコンに巻き込まれたくないです」

この特徴的な語尾の少年は川秋直秀。

あの秋川やよいの従兄弟である。付いてきているのは妹の川秋メル。

なお、戦略的撤退していなかったら、危うくやよいとインピオうまぴよいしていただろう。

まあ、作者と一部の読者諸賢には刺さったであろうが。

芦田の故郷？

「いやあ、まさか友達に会えるなんて．．．もう誰もいないものか．．．」

「いえいえ、まさか先輩に再び会えると思いませんでしたよ！」

．．．まさか足が透明になっているとは思いませんでしたか？」

「多分、意識だけがこの世界に戻ってきたんでしょね．．．」

あと、前から言っていますが、敬語でなくてもいいですよ」

「うっす」

芦田はようやく人に出会えた。それも、かつての後輩に。

だが、状況は異様であった。バリケードが作られているのだ。

「．．．ところで、やけに世紀末になっているんですが、何かあったんですか？」

「いや、ちよつとな．．．急に自殺する人が急増したというか．．．」

「ありやま。僕の両親は．．．」

「ああ、大丈夫。元気にやってるよ。というか、この町を上手く切り盛りしてくれてる。

そうそう、今、二木市は二木町って名前が変わってるんだよ」

「えっ、町？ああ、そういうことですか．．．」

「そう、人がたくさん減ったからね。それも世界中で。」

俺が昔いた神戸市なんてひどいもんだよ．．．もう死体の回収すら追いついてない」

校庭

「はあ．．．はあ．．．まだ追ってきてる！」

「やっぱり、こういうのって俺がちゃんと育成できてるかわかるな．．．」

「トレーナーくんの毎日のお弁当のおかげで、スタミナたっぷりあるからね」

綾秀は朝からずっと逃げていた。

そして、偶然にも一人のトレーナーと合流した。

「おっ、守埼じゃねえか」

「綾秀先輩！そっちも逃げてるんですねー！」

守埼はハルウララを担当しているトレーナーである。

あと、ライスシャワーとマヤノトップガンも担当している。

「お兄様、待ってよ♡」

「マヤノ、わからせたい♡」

「追いかけてっこ楽しいよー！」

当然、彼の担当バたちは追いかけてきているわけだ。

「当然、俺はまだうまびよいなんてしたくないんです。」

とくに、ライスはずっと一緒に育ってきた妹なんですから」

「お前、一人っ子じゃなかったっけ？」

「うるさい！俺はお兄様なんですよ！」

・・・それはともかく、ウララはまともそうでもよかったです。

あれは多分、追いかけてっこしているだけのつもりでしょう」

「・・・そうだな」

綾秀はベテランだからこそ、わかっていた。

本性を隠しているだけで、もう立派な獣だった。

目を見ればわかるのだ。おそらく、自分が発情している理由も理解しているだろう。

ガスで自分が発情しているとわかっていながら、純情を装っているのだ。

・・・本当に、彼女はただ負けているだけなのだろうか。

そう考えるだけでも、背筋がぞくりとした。

「綾秀先輩、あんな場所に小屋が！」

「ドアも頑丈そうだ・・・！よし、あそこに逃げ込むぞ！」

「ぼくも一緒に入っているかい！これ以上、ネイチャに絞られたら死ぬ！」

こうして三人一緒に小屋に飛び込み、ドアをすぐに閉めた。

だが、やけに蒸し暑かった。そして、先客がいた。

睦月だ。あの、セイウンスカイのトレーナーだ。

彼は全裸だった。

「おや、綾秀先輩。バーニヤにようこそです。

スカイはさつきバテたので、外で寝かせているです」

「ば、バーニヤ？」

「ええ、ロシアの蒸し風呂ですよ」

「そうか・・・えつ、ぼくたちマズくない？」

中は熱すぎて、外にはウマ娘たちが・・・」

睦月にはやつと笑う。

「ええ、ですから選択肢は一つだけです」

芦田の部屋

すでにピンク色の空気は消えていた。

芦田はゆつくりと目を覚ます。

「・・・ギンさんと久しぶりに話せてよかったですね。

途中で覚めてしまいました、別れの挨拶もできました。

でも、ユナさんたちには会いたかったです・・・。

・・・自殺していないといいのですが・・・」

ふと、髪の違いに気が付く。

なんか湿気を感じる上に、はむつとされる感覚がするのだ。

横を見てみると、オグリが寝ながら髪をはむはむしていたのだ。

「・・・オグリさんったら」

そういえば、髪がかなり伸びている。

この世界に来てから、床屋にもあまり行っていないかった。

しばらくすると、彼女も目を覚ました。

「・・・おはようございます、オグリさん」

「・・・お、お、おはよう・・・」

さすがの彼女も恥ずかしくなったようだ。

とりあえず、二人とも顔を洗って、部屋の外に出る。

・・・トレセンは別の意味で世紀末になっていた。

もし、この表現が許されるならば・・・性紀末だ。

「何があつたんでしょうか・・・??？」

「さあ・・・？」

出られた。

理事長もなんとか冷静さを取り戻し、学園は平時に戻ったとき。めでたしめでたし……。

「むう、タマちゃん探してたら効果が切れちゃいました……」

「そういえば金課くんもいないね……まあ、彼のことだから戻ってくるだろうけど」

???

「・・・タマモ、言わなくてはいけないことがある」

「な、なんや・・・聞きとうないけど・・・」

「迷った。大都会だもん」

「嫌やー！こんな死体だらけの街で迷子になりとうなかつたー！」

「俺だつていやだよ！病死体だと思つたら、全部自殺した感じだつたし！」

「俺のせいじゃなくて安心したけど、こんなの逆に怖いよー！何があつたんだよー！！」

「いつになったら帰れるんやー！」

「このままでとトレーナーとこの死体しかない世界で永遠に・・・。」

「うん？アダムとイブもええかもな・・・」

「嫌だー！担当バがなんか変なこと考えだしたー！早く帰りたいよー！課金したいよー！」